

## 『樺太日日新聞』(1912-13年) 掲載 サハリン先住民族と拓殖博覧会関係記事：目録と紹介

Headlines and Contents of Sakhalin Indigenous Peoples and Colonization Expo-  
related Articles from KARAFUTO-NICHINICHI SHIMBUN(Sakhalin Daily News)  
1912-1913

田村将人 (TAMURA Masato)

資料情報室長 (Head, Division of Collection Management, National Ainu Museum)

キーワード：アイヌ、ニヴフ、ウイльта、新聞記事、人間展示

Keyword: Ainu, Nivkh, Uilta, Newspaper Articles, human display

### 解題

1912(大正元)年10月1日～11月29日、東京の上野で開催された拓殖博覧会(北海道出品協会主催)と、翌1913(大正2)年4月21日～6月19日、大阪の天王寺で開催された明治記念拓殖博覧会(大阪商工会主催)に出場した、サハリン先住民族(樺太アイヌ、ニヴフ、ウイльта)や北海道アイヌに関する『樺太日日新聞』(以下、『樺日』)の記事を翻刻して紹介する。

各地の先住民族が博覧会場で暮らしながら出場するという〈人間展示〉に関する情報を、樺太で発行された新聞から関係記事を蓄積して、出場した先住民族の〈声〉に可能な限り迫ることを目的とする。具体的な検証、検討は別稿にて行うことを期して解題にかえる。

拓殖博覧会に北海道、サハリン、台湾の先住民族を出場させた目的は、次のように説明されている。「拓殖博覧会ハ新領土及勢力圏内ニ於ケル天産物、加工品ノ蒐集ノミニ満足セス理学博士坪井正五郎ヲ顧問トシ帝国版図内ノ各人種ヲ招来シテ親シク彼等ノ性格及生活状態ヲ観覧シ今後如何ニ彼等ヲ訓導スヘキカヲ研究スルノ機会ヲ内地人ニ寄与スル」(『拓殖博覧会事務報告』1913年、p.64)。開催にあたっては、当時の東京帝国大学教授で東京人類学会の坪井正五郎のほか、石田収蔵が関わっていたことは板橋区立郷土資料館に残されている資料から分かっている。また、翌年の明治記念拓殖博覧会の報告書では東京人類学会の関わりが触れられていないが、ほぼ同様の目的だったことが分かる。

これら2つの博覧会と先住民族の関わりについて山

路勝彦『近代日本の植民地博覧会』や小原真史「『人類館』の写真を読む」に詳しく、また新聞記事から分析を試みたものに小西雅徳「拓殖博覧会における人種展示と東京人類学会の役割について」などの先行研究がある。

『樺日』記事では、拓殖博覧会と明治記念拓殖博覧会の出場者名について、異言語である先住民族の各言語を聴き取るのは至難だったとみえ、記事によって氏名には多くの異表記があるため、公式の報告書と比較しながらいくつかの名前の表記例を挙げる(表1、2)。日本語名のほか、アイヌ語名に関しては別名でも記録された可能性がある。出場者である先住民族のうち、男性の中には首長の役職に就いていた者がいたり、男女ともに文化伝承にたずさわる者がいたり、出場後にも氏名を知られている人物が多いことから匿名としなかった。

アイヌなど先住民族の歴史資料の資料論として、先住民族自身の著述(発言記録)がほとんどない時代にあって、あくまでも新聞記者のフィルターを通した言説であることを踏まえた上で、新聞記事からどのように先住民族の〈声〉や生活のリアリティを読み取るかは大きな課題である。匿名のマイノリティの〈声〉としなかった所以でもある。

また、今から約110年前の新聞記事では、現在では使われない差別的な表現が多用されるが原文のまま翻刻した。あくまでも当時の歴史的背景を明らかにすることを目的としており、民族差別を助長する意図はない。当時の新聞記事が「内地人」の〈文明〉に比べて先住民族がいかに〈遅れて〉いるかを奇異なまなざしで

描いてそれを読者が受容するという構図を痛感せざるを得ない。この点において、110年を経て幾多の改善がなされてきたことも実感するが、マイノリティへの偏見は形を変えて再生産されてきたことも想起せざるを得ない。

本稿で紹介する記事は、編者が北海道立図書館や北海道大学附属図書館にて2003年頃に『樺日』のマイクロフィルムから複写したもので、見逃した記事があることを恐れる一方、一部を厳選して翻刻し紹介することとした(表3)。

なお、東京で開催された拓殖博覧会に比べて、大阪での明治記念拓殖博覧会の記事は『樺日』では少なく、樺太と大阪の関係性が東京と比べて薄かったのか、『樺日』と提携する新聞社の有無に起因するのかは分からない。大阪での北海道アイヌに関する記事も少ない。なお、同内容の記事が『北海タイムス』や『小樽新聞』に掲載されていることが分かっていることから、配信記事や転載という可能性も含めて検証する必要がある。

『樺日』に関しては、北海道大学文学部が報告書の中で「資料篇『樺太日日新聞』掲載のサハリン先住民族に関する記事データベース」を掲載しているほか、山田伸一や会田理人がほかのテーマにおいて資料紹介を行っている。編者も『サガレン新聞』を紹介するにあたり、新聞記事の資料論的な位置づけを考えた経緯がある。

翻刻について、判読できなかった文字は■、活字が空白の場合は□、(人名を除き)旧字や異体字、変体仮名は現在一般的に使われる漢字・ひらがなに統一し、その他編者の気づいたことは〔 〕内に入れた。

この資料紹介は、国立アイヌ民族博物館調査研究プロジェクト2021A06および2023B03、2024A02の成果の一部である。

### 参考文献

会田理人「『樺太日日新聞』掲載コンプ関係記事: 目録と紹介(1923-1929年)」『北海道博物館研究紀要』1, pp.149-160, 2016年。

小西雅徳「拓殖博覧会における人種展示と東京人類学会の役割について」『國學院大學博物館學紀要』第29輯, 2004年。

小原真史「『人類館』の写真を読む」『photographers' gallery press』14, 2019年

拓殖博覧会編「拓殖博覧会事務報告」拓殖博覧会残務取扱所, 1913年(国立国会図書館デジタルコレクション, 閲覧日: 2024年12月9日)

拓殖博覧会北海道出品協会編「拓殖博覧会北海道出品協会事務報告 明治記念拓殖博覧会北海道出品協会事務報告」1914年。

田村将人「サガレン新聞(1921-1924年)掲載アイヌ関係記事: 目録と紹介」『北海道開拓記念館調査報告』第46号, pp.179-188, 2007年。

田村将人「1912年、サハリン先住民と研究者、行政の三者に関するメモ」『北海道開拓記念館研究紀要』39, pp.117-124, 2011年。

北海道大学文学部古河講堂「旧標本庫」人骨問題調査委員会編「古河講堂「旧標本庫」人骨問題報告書」II, 2004年。

明治記念拓殖博覧会編「明治記念拓殖博覧会報告」1913年。

山路勝彦「近代日本の植民地博覧会」風響社, 2008年。

山田伸一「『樺太日日新聞』掲載のサハリン朝鮮民族関係記事: 目録と紹介」『北海道開拓記念館調査報告』第46号, pp.117-178, 2007年。

表1 拓殖博覧会に出場した先住民族の名前

『拓殖博覧会事務報告』	『樺日』記事
樺太オタサムアイヌ ロコ チカマ(婦) イネヘンエコンノ(長女) チュココモリ(大工)	「小田寒板坂六助長男妻つかよ、娘てる子及び内淵チュココモ(土人大工)」(9月25日付) 「樺太方面アイヌオタサンの酋長坪澤六輔の娘テル子」(10月20日付) 「酋長坪澤六助」「嫁女のチカマ」「棟梁チュココモリ」(11月1日付) 「刺繍 樺太アイヌスクタリー製作」(11月9日付) 「樺太アイヌ、オタサンの酋長坪澤六助同人嫁チカマ、娘テル子、大工のチュココモイン」(11月23日付) 「アイヌ種の坪澤六助(六〇)同テル子嬢(一二)同チカマ(二三)チュココモリ(五〇)」(12月18日付)
ギリヤーク ポーコン チエフレスト(妻) プニユン(従僕)	「ギリヤーク人数香支庁内ホウエ村の酋長ポーコン(五十)妻チエクレン(五十二)及びプニオン(十九)」(10月9日付) 「ギリヤーク種族のポーコン(四十五六)チエフレット(五十二)の夫妻」「ギリヤークのプキオン(十九)」(10月13日付) 「フギオン」(10月15日付) 「舟 ギリヤーク族ポーコン製作」(11月9日付) 「樺太ギリヤーク族の統領ポーコン、同人妻サンカ、青年プキオン」(11月3日付) 「ギリヤーク種のポーコン(四七)チエフレンド(六〇)プニオン(一九)」(12月18日付)

オロツコ チバロツク	「敷香キユーリン川の畔に住むオロチョン酋長パロフ(五十五)」(10月9日付) 「オロチョン族の酋長イヴロツク」(10月10日付) 「オロツコ種族のイバロク(六十位)」(10月13日付) 「オロツコ族の統領エバロク」(11月3日付) 「オロツコ種のイバロク(五七)」(12月18日付)
北海道日高アイヌ コレヤタン キシノ(孫) ウエンサナス(彫刻師)	「北海道アイヌのウエサナシ」「北海道のアイヌのバッコ(お婆さん)コレヤタニ」(11月1日付) 「端書入函 北海道アイヌ貝澤ウゴサナシ製作」(11月9日付) 「北海道アイヌの老翁貝澤ウエサナシ、老媪南邊澤コレヤアタン」(11月23日付)

表2 明治記念拓殖博覧会に出場した先住民族の名前

『明治記念拓殖博覧会報告』	『樺日』記事
樺太アイヌ 男 白川モイマ 同女子 クルバルマ 男 ハイバ貞介 同女子 スユカ	「保呂の白川茂衛門(五四) 同人妻アソワンマ(三七) 及小田寒ハイバツテイ(四十) 同人娘シュカ(一三)」(3月13日付) 「愛奴はモイマ君(五六) ハイバツテイ君(四〇) クルバルンマさん(二九) ハイバツテイ君の娘シューカさん(一三)」(7月4日付)
樺太ギリヤーク 夫 ウエラツカ 妻 アルライカ	「ギリヤークでは男ウエラッカ(二八) 其妻アルライカ(一八)」(卯太郎)(4月3日付)
樺太オロチョン 男 ワイセル 同女子 マイヤ	「オロツコではシャチカに部落の男ワシラノ(三六) 其娘マリヤ(一五)」(4月3日付) 「オロチョンではワシライ君(三三) に娘のイマリヤちゃん(一二)」(7月4日付)
北海道アイヌ 男 貝塚〔貝澤〕ウエサナシ 妻 モヌンパ 甥 前太郎 男 ウタンレカ	〔見つからず〕

表3 『樺日』に掲載された拓殖博覧会および明治記念拓殖博覧会関係記事目録

日付	面	記事表題
1912.04.14	?	「愛奴の大气焰／△犬橇は汽車より早い／△貯蓄して博覧会見物」
1912.05.10	2	拓殖博覧会
1912.05.29	2	拓殖博覧会
1912.06.05	2	拓殖大博覧会／本秋上野に開催さる／出品に意匠を加へよ
1912.06.06	2	拓博と樺太
1912.06.08	2	拓殖博覧会と樺太／▽参観団も組織されん
1912.06.09 ?	?	拓博観覧団計画
1912.06.16	2	拓博出品調査／▽代表的出品研究
1912.06.20	2	拓博出品計画／優良獣皮の買上
1912.06.21	1	拓博計画決定／▽六十日間下谷池の端にて
1912.06.21	2	拓博局と当局／拓殖局某高官談
1912.06.22	2	拓殖博覧会彙報／▽趣意書と諸規則
1912.06.27	2	拓博委員会
1912.06.28	2	拓博彙報
1912.06.28	2	大泊と拓博出品
1912.07.02	1	拓殖博覧会方針

日付	面	記事表題
1912.07.03	2	拓殖博協議会／▽本島農村模型出品
1912.07.03	2	拓鉄の全通式彙報／▽賓客列車南北同時着／▽或は豊都未曾有盛観
1912.07.05	2	大泊の拓博出品
1912.07.06	2	拓博出品の模型
1912.07.10	1	拓殖博の趣旨
1912.07.11	1	拓博の外国出品
1912.07.11	2	拓博と北海道出品／▽出品約二千点
1912.07.11	3	本島の名物菓子／拓博へ出品の申込み
1912.07.14	2	拓殖博と本島
1912.07.14	2	樺太産鯨骨のアーチ／▽拓殖博準備進捗
1912.07.16	1	拓博の経費予算
1912.07.16	2	拓博出品協議
1912.07.17	2	拓博出品計画／△表門意匠募集か
1912.07.18	2	国境標の模型〔模型〕／△拓博■出品せむ
1912.07.20	2	拓博と本島出品
1912.07.23	2	拓博出品協議
1912.07.23	2	馴鹿四頭到着
1912.07.24	1	拓殖博の出品
1912.07.24	1	博覧会規則改正
1912.07.25	1	拓殖博と農商務
1912.07.26	2	牝牡四頭の馴鹿
1912.07.28	2	乾籬〔乾溜〕場模型出品
1912.08.02	2	拓博中止せず
1912.08.03	2	拓殖博と視察
1912.08.03	2,3	拓博出品物は無税
1912.08.07	2	拓博手工部の調査
1912.08.07	2	犬橈実物模型
1912.08.07	2	拓博事務囑託
1912.08.07	2	公人私人
1912.08.09	2	拓博と樺太の出品／露式家屋の模型も有／麝香鹿の鞆丸もあり
1912.08.10	2	拓殖博と樺太／▽陳列意匠は当分秘密／▽剥製台は第一呼物乎／漁場模型一個千余円
1912.08.14	2	拓博船車賃の割引／団体観覧は五割引
1912.08.18	2	拓博出品物発送期
1912.08.28	2	樺太の禽獣類
1912.09.01	2?	拓博出品の発送
1912.09.07	2	拓殖博と土人▽オロチョンの迷信
1912.09.11	2	活動写真撮影
1912.09.19	2	拓殖博前景気／▽樺太は随一也
1912.09.25	2	拓殖博と土人
1912.09.27	2	土人馴鹿出発
1912.09.29	2	拓博前景気／▼樺太館の好評
1912.10.01	2	拓殖博の内容
1912.10.01	3	己れの領分だ／アイヌ六助の逸話
1912.10.03	2	本社東京特電／拓殖博覧会開館
1912.10.05	3	拓博は大景気／異彩を放つ樺太館
1912.10.08	2	両極土人握手

日付	面	記事表題
1912.10.08	2	拓殖博の瞥見
1912.10.09	3	始めて世界の広まを知った／拓博出場の珍客／本当固有の土人
1912.10.09	1	座して殖民地を巡遊す拓殖の設備
1912.10.10	?	拓博の土人館／人気の焦点となれる樺太に特有の二種族
1912.10.10	2	拓博の開館(続)／土人を囲んだ群集
1912.10.10	2	拓殖博覧会より
1912.10.10	3	土人握手会の後報／▽樺太アイヌの謝辞
1912.10.10	3	拓博の土人館／人気の焦点となれる樺太に特有の二種族
1912.10.10	3	拓博と余興館△二日目の大盛況
1912.10.10?	2	拓殖博樺太館／人気殆んど樺太館に集る
1912.10.11	2	樺太館の好評
1912.10.11	3	宛然殖民地に巡遊するの感あり／奇抜尽の余興館／三日より開館す
1912.10.12	3	拓博の人気を一手に集めてる馴鹿／▽珍奇なる北樺太の動物／▽土人の最も大切な家畜
1912.10.12	3	三大臣樺太少女の筆跡を貰ふ／拓博開館第一日の各大臣と松方老候
1912.10.13	2	三大臣と少女／拓博開館第一日樺太少女の筆跡を貰らふ
1912.10.13	3	樺太土人自動車で東京見物／帝都の大いに喫驚す
1912.10.13	3	六人種観光館に握手会を開く
1912.10.15	3	樺太土人自動車で東京見物／帝都の大に喫驚す
1912.10.15	3	勇猛果敢なる樺太犬／拓殖博覧に於ける愛犬家の垂涎三尺
1912.10.16	2	拓殖博樺太館／▽人気殆んど樺太館に集る
1912.10.16	2	拓博観覧団員募集
1912.10.16	3	生た学問をする博覧会／正午までに一万人学生らの喜ぶ出品
1912.10.17	1	輝ける拓博
1912.10.17	1	拓博記念絵葉書
1912.10.17	3	拓殖博樺太館／△人気殆んど樺太館に集る
1912.10.17	3	生蕃観光団と樺太アイヌ
1912.10.19	2	拓博は完全無視／志賀重昂氏談
1912.10.20	2	樺太館大成功／木内技師談片
1912.10.20	3	生蕃観光団拓博の生蕃を訪なふ／無事かとはばかり相擁して泣き樺太土人アイヌ等も一堂に会す
1912.10.20	3	テル子の大繁忙／拓博樺太の美人寒い日の好対照
1912.10.22	1	日本版図内の人種
1912.10.23	1	拓博の樺太館／思ふに勝る樺太物産今や正に奮励の秋ならむ
1912.10.23	2	拓博観覧団員募集
1912.10.25	1	拓殖博の概観／殖民地の縮図
1912.10.29	1	拓殖博を観る
1912.10.29	2	日々小言
1912.10.29	3	樺太愛奴結婚の奇習(上)／姦通の場合は奈何
1912.10.30	1	拓博樺太館所見
1912.10.31	2	拓殖博覧会より
1912.10.31	3	李王世子殿下拓博を観る／樺太土人と生蕃等は動物園で大喜び
1912.11.01	2	東宮殿下御台覧／樺太出品には特に興味／を以て御覧あらせ給ふ
1912.11.01	2	小学生の拓博観(一)(先生は酷いなア)
1912.11.01	3	土人一堂に会し／て唄ひ且つ踊る／拓博樺太アイヌの／落成移転の大祝宴
1912.11.01	3	オロッコ君と生蕃君の帝劇観
1912.11.03	3	拓博の土人歓／喜首相を迎ふ
1912.11.06	3	樺太土人の珍／妙な結婚(一)／オロッコ君と／ギリヤーク君

日付	面	記事表題
1912.11.07	3	樺太土人の珍/妙な結婚(二)/オロッコ君と/ギリヤーク君
1912.11.08	3	拓博土人へ菓子料を賜はる▽米田侍従の視察
1912.11.08	3	樺太土人の珍/妙な結婚(三)/オロッコ君と/ギリヤーク君
1912.11.09	2	本社東京特電(七日、八日)▼各人種懇親会
1912.11.09	2	樺太の古文書/間宮林蔵使用の測量鎖と古頭巾
1912.11.09	3	拓殖各土人へお土産
1912.11.09	3	東宮拓博御成/各植民地の風俗産物に御趣味深く/三時間に渡りて御熱心の御見学
1912.11.10	3	樺太土人の珍/妙な結婚(四)/オロッコ君と/ギリヤーク君
1912.11.12	3	樺太土人の珍/妙な結婚(五)/オロッコ君と/ギリヤーク君
1912.11.14	3	拓博六人種の/懇親会と余興
1912.11.15	?	六人種の大宴遊(二)
1912.11.21	1	拓博の樺太館
1912.11.22	1	拓博の事務所より
1912.11.23	1	拓博の事務所より
1912.11.23	2	人種懇親会が与へた効果/小松小浜両氏の談
1912.11.23	3	拓博人種懇親会/各地の蕃人連と内地人と/何れも一堂に歌舞宴遊す
1912.11.26	1	拓博の事務所より
1912.11.26	2	常設拓殖博物館に就て(上)
1912.11.27	2	常設拓殖博物館に就て(下)
1912.11.28	1	樺太協会出品(一)/拓殖博覧会陳列場
1912.11.29	1	樺太協会出品(二)/拓殖博覧会陳列場
1912.11.30	1	樺太協会出品(三)/拓殖博覧会陳列場
1912.12.01	1	樺太協会出品(四)拓殖博覧会陳列場
1912.12.03	1	樺太協会出品(五)拓殖博覧会陳列場
1912.12.03	3	犬橇で氷海を突破して帰る樺太人/土人連の深い印象
1912.12.05	1	樺太協会出品(五)拓殖博覧会陳列場
1912.12.05	2	拓博受賞者
1912.12.06	1	樺太協会出品(六)拓殖博覧会陳列場
1912.12.07	1	樺太協会出品(七)拓殖博覧会陳列場
1912.12.18	3	珍客郷に急ぐ
1912.12.19	3	拓博帰りの珍客
1912.12.20	3	昨朝の停車場/▽珍客愈々郷に向ふ
1912.12.20	3	珍客の神社参拝
1913.01.08	2	土人等の着敷
1913.02.15	2	冬の夜話(二十九)/アイヌにしてはお綺麗な方
1913.02.20	2	大正博の樺太出品
1913.03.02	2	拓殖樺太出品協会/昨日の発企人会開催
1913.03.07	2	拓博出品彙報/△出品協会役員会決定
1913.03.08	2	拓博出品物の発送
1913.03.13	2	拓博と土人出場
1913.03.13	2	拓博参考部出品規程
1913.03.13	2	公人私人
1913.03.14	2	拓博と団体観覧
1913.04.03	3	拓博行の土人/一昨夜到着す
1913.04.05	2	拓博行土人全部着
1913.04.05	2	馴鹿の輸送

日付	面	記事表題
1913.04.08	2	拓博行土人出発
1913.04.13	2	拓博開会延期
1913.04.18	2	拓博出品発送済
1913.04.22	2	拓博と特設郵便局
1913.04.23	2	樺太館の大好評
1913.04.25	2	拓博と樺太館(上) /▽設備万端遺憾なく▽到る処賞讃を博す
1913.04.26	2	拓博と樺太館(下) /▽設備万端遺憾なく▽到る処賞讃を博す
1913.04.29	3	拓殖博覧会の樺太館
1913.05.07	3	樺太風光映写の大成功 /大坂〔大阪〕拓博に於ける
1913.05.08	2	拓博史(承前)(四月三十日)
1913.05.10	2	拓博史・第二信
1913.05.21	2	拓博史
1913.05.22	2	拓博史 /▽北海道館(二)
1913.05.23	2	拓博史 /特派員▽樺太館
1913.05.23	2	出品協会予算
1913.06.04	2	拓博史 /特派員▲満洲参考館 /主任事務官説明
1913.06.12	2	拓博褒賞授与式
1913.06.17	2	拓博受賞評報
1913.06.17	2	明治記念博覧会参加
1913.07.02	2	拓博土人帰還
1913.07.04	3	拓博行の土人帰嶋す
1913.07.10	2	拓博出品物寄贈
1913.07.24	2	福永事務官帰庁
1913.07.24	2	拓博褒状の到着
1913.09.14	2	大正博と拓殖館
1913.10.03	2	樺太と特産品博覧会
1913.10.03	2	明治博の感謝状

## 関係記事

1912.04.14「愛奴の大气焰／△犬橿は汽車より早い／△貯蓄して博覧会见物」

過日東海岸地方を旅行した守備隊の某将校が小田寒の丸メ漁場で休憩した折に丁度アイヌ部落総代六助の次男某に邂逅した、此の〔坪沢〕六助といふ老愛奴は若い時分には東海岸の愛奴中唯一と呼ばれた剛の者で、真偽は判然せぬが徳川幕府の末に松前公の取立てで士分となり両刀を帯んで江戸へ上ったこともあるとは六助自からの常に人に語って居る所である、斯様に多少は若い時分から邦人にも接して居たから愛奴中での開けた男として他からも取扱はれて来たのであるが、六助には二人の男の子があって何れも父の感化を受けて早くから日本の文明に接して居た殊に其次男は愛奴中での才子であって日本風に云ふたならば快活な至極く面白い気象〔ママ〕の男であるのだ、彼は常に父六助から、江戸見物の物語を聞かされてあるから自分も生涯一度は是非其内地へ渡って所々方々を見物したいとの希望を抱き、それには奈何しても金から先に拵えねばならぬと、好きな酒も禁じ煙草も喫まずに一生懸命になって働いて居る、此の事は予ねて某将校の聞知して居る所であったから漁舎で邂逅したを幸ひ尚ほも出精して働くがよいと励ました、そして内地を一度見物しろ、内地に行けば電車といふものもあるし鉄道も至る所に敷かれて夫は夫は賑かであるぞと勧めた、ところか六助の次男は内心では日本の文明に驚いて居るもの、其所が人情普通の負惜みといふものがあるから、鉄道や汽車は栄浜で一度見たことがあるが如何ら日本人の鉄道でも雪には到底叶はぬと見へて運転を休む場合があるが、愛奴の犬橿は雪が降れば降る程調法で汽車と駆つこをしても負けぬ、此点は愛奴の方が、余程同本〔日本カ〕人よりも豪いのだと、反返っての大汽焰に某将校はギヤフンとばかり一本参つたとやら、それから此の男は前にも記した通り内地へ渡って見物したいばかりに酒も煙草も禁めて働いて居る甲斐かあり今では二百円ばかりの貯金をして居るさうだが今後五ヶ年を辛抱して来る五十年に大博覧会の開かれた時東京へ行きたいと希望してるさうな。〔全文〕

1912.05.10「拓殖博覧会」

拓殖局は来九月一日より東京上野不忍池畔に拓殖博覧会を開催し朝鮮満洲台湾樺太等の産業に関する出品を陳列すべく同経費は総額九万五千円にて内六万円は入

場料其他の雑収入より支弁の計画なりと〔全文〕

1912.06.20「拓博出品計画／優良獣皮の買上」

土人に関する出品に就ても目下資料蒐集中にて土人の偶形、犬橿(犬は剥製)等の出品計画あれども陳列場狹溢なる為未だ決定に至らず〔一部〕

1912.07.14「樺太産鯨骨のアーチ／▽拓殖博準備進捗」  
余興の代りにはアイヌ人のパイプ製作生蛮〔ママ〕人の竹籠製作の如きは場内に試みしめ観覧者をして身親しく是等殖民地にあると同一の感を起さしめんとて理科大学の坪井博士此方面の顧問となり頻に種々珍奇の計画を試みつゝあり〔一部〕

1912.07.16「拓博出品協議」

樺太庁の拓殖博覧会出品計画は竹内事務官主任となり柄内技師、中牟田技師、福永属、細田技手等執筆し着々と準備を進めつゝあるが過般各殖民地の委員協議会に参列し諸種本会との打合せを終りて帰庁せる福永属の復命も既に終りたるに付昨日は午前より長官室に於て各部長以下の会議を開き万事の打合せをなせり〔全文〕

1912.07.20「拓博と本島出品」

拓博出品に関する本事は未だ纏らず、陳列■意匠等は東京に於て之等の事に慣熟せる人に託しあり其内何等かの成案を齎らすべし、島内民間よりの出品申込は既に各支庁より廻付し来り目下其選定中にあり本庁出品中、模型は森林、漁場、農業地等既に決定注文し、国境の模型は其調製指示方を他に依頼したるが引き受けらるゝや否未だ回答に接せざれば未定なり、剥製は膾炙獣、麝香鹿、山猫、海豹、クツリ、狐、鳥類、馴鹿等を出す見込なり、思ふに剥製はよく樺太の自然界を説明し模型は各産業界の人工的進歩をよく説示し得るも■なし〔ママ〕と信ずとは出品計画事務に関する主任竹内審査事務官■談なり〔全文〕

1912.07.26「牝牡四頭の馴鹿」

敷香より送り来れる四頭の馴鹿は一昨日二番列車にて牧夫に牽かれ当地に着せり、其内二頭は牡、他は牝にして概して牡は牝より大なく〔ママ〕、色は牡一頭は白く、他は皆黒褐色なり、角は十月となれば鹿の如くなる由なるも今はまだ身体同様の毛を有する皮もて蔽はる其大なる事驚くに堪え、中にて最も大なる白き牡の如きは長さ三尺を越え、両角共根本より前方に向け親

角に匹敵するが如き枝を生ず、幹の所々にも枝あり、殊に末端は五、六に岐れ、恰も巨鬼の掌を挙げたらんが如し、弯形をなして頭の上に枯木の如く拡がる体は総て鹿に酷似し、傍人の顔は牛に似て長く、頸は馬の如く、体は馬の瘠せたるに似、尾と蹄は鹿の如しと云ふを聞けり、最も大なるもの高さ約四尺、長さ七尺内外、頻りに青草を喰ひ、角もて脚、臀部等を搔く、或人は塩を与へざれば衰弱甚しと云へり、樺太庁にては一日より博物館横に繋居るが昨日は庁前の遊園地にて学校生徒に参観せしめたり、此内博覧会に出品するは牡牝各一頭にして本日屠殺剥皮する筈〔全文〕

#### 1912.08.02「拓博中止せず」

拓殖博覧会中止の旨昨報せしも誤聞に出でたり実は予定通り計画を続行し九月下旬開会すべしと〔全文〕

#### 1912.08.03「拓殖博と視察」

今秋上の公園不忍池畔に於て開催すべき拓殖博覧会にては其附属事業として各殖民地土人の生活状態を实地に示すべき手工場を建設するの計画を立て理学博士坪井正五郎氏は其設計を講じ氏は土地住宅の構造及び建築材料の調査並に手工業者の庸聘に関し石田理学士を北海道樺太に大西理学士を朝鮮台湾に特派することに決し両氏は何も其目的地に出発せり〔全文〕

#### 1912.08.07「拓博手工部の調査」

拓殖博覧会本会にて土人工工部を特設し人類学者坪井博士之が監督を託せられたる事既報の如し同部の事業は各殖民地の土人を招き各土人特種の建物を建て、其中に入れ夫々特種の手工をなさしめ製品を販売せしむるにあり本島の土人はアイヌ、ギリヤーク、ヲロッコ〔オロッコ〕等各人種を網羅し手工はアイヌの刺繡彫刻ギリヤークの樺皮細工其他可成特色あるものを集めて其施工の实地を観覧せしめ希望者に頒つ事となり本島の实地調査は去四十年及四十二年の両回人類調査〔ママ〕のため来嶋したる事ある石田理学士囑託され同氏は去四日来嶋樺太庁に出頭万事の打合せをなし一日昨日調査のため敷香に向へり今回は先づ建物及び生活状態等を調査し帰京後諸準備を整へ各土人は其上迎える事となるべしと〔全文〕

#### 1912.08.07「公人私人」

▽村田庄十郎(樺太庁囑託)敷香、名寄方面動物調査のため四十五日の予定を以て人夫三名を卒る一日先

づ敷香に向へり

▽石田修蔵〔石田収蔵〕(拓博囑託)一昨日土人調査のため敷香に向へり

#### 1912.08.07「犬橿実物模型」

樺太庁の拓博出品計画中に犬橿実物模型の出品をなす事に決せり犬は剥製にて頭数六頭位の予定にて其製作方は多分東京教育標本社に托せられるべく橿は本嶋より送付すべしと〔全文〕

#### 1912.08.09「拓博と樺太の出品／露式家屋の模型も有／麝香鹿の睾丸もあり」

▽土人

土人関係の出品物中には敷香に於て射殺したる麝香鹿の睾丸二個、海豹鳥の膾牖獸皮三枚先づ目を煮くべく、丸太造家屋模型は実物其儘ならしめんが為めペーチカの実物をさへ据付くべし愛奴用外套も珍なるべく獸皮製の頭巾、同靴、さてはギリヤーク、オロチョン用の防寒長靴、同雑囊大小共、其他土人衣服地装束物一式あり、トンコリユ一と称する三味線も奇なれば六頭付犬橿の実物は観者をして、驚嘆せしむるに足るべし其他樺太庁庶務課関係出品物の大要左の如し

狼皮一三、熊皮一、獺皮二、海豹皮四、窟狸皮二、スキー一、防寒靴三、ステッキ二十、菓子、交通図、教育図、気象図、鞍掛、防寒用手袋、チヌエルナ(花筵)二、チヌエ、ニエイボ碗二、シャアレンパ碗二、アックエヌチ挟一、髭払二、等あり

尚ほ樺太中学校、豊原小学校、豊原駅、豊原郵便局、樺太庁、樺太慈恵院、病院、寒敷競走会等の各写真は引延の上着色写真となりて会場的美観を添ふべしと云ふ〔一部〕

#### 1912.09.07「拓殖博と土人▽オロチョンの迷信」

拓殖博覧会事務所にては場内に参考館を建築し各殖民地土人の実生活を移す計画あり本嶋土人に関しては大学講師石田理学士囑託を受けて之が調査のため去七月末来島其後東海岸方面に入り实地調査中なりしが、同氏はギリヤーク、オロチョンの各夫妻アイヌの夫妻及一子の上京を交渉決定□又各土人の家屋生活器具等も総て買入れの契約をなし彼等土人引連れ及び置入れ品発送のため本会事務所よりは更に本月中に委員来島すべし茲に滑稽なるはオロチョンの女は一度船に乗る時は直ちに死神の襲ふ所となるとて上京を肯んぜず数回交渉の結果漸くにして納得せしめたる由〔全文〕

1912.09.11「活動写真撮影」

中沢商会活動写真撮影技師は既に用務終りて帰京したるが其撮影せる者は海豹嶋臘豚獸、汽車沿道、多来加に於ける馴鹿放養実景等にして之に用したるフィルムは長さ一千六百尺に達せりと尚汽車沿道実景中には大泊、豊原、栄浜の各市街、樺太神社、樺太庁、栄浜沖鱒漁、農村、土人部落、牧場、森林平野等の実景をも含める者なる由〔全文〕

1912.09.25「拓殖博と土人」

拓殖博覧会本部の招に応じ上京す可き本嶋アイヌは小田寒板坂六助〔ママ〕長男妻つかよ、娘てる子及び内淵チユコモ(土人大工)の四名にして同人等は本日栄浜を経て来豊し二十六日出発す之が監督のため樺太庁土人事務嘱託佐々木政治氏上京す可く同時に出張の馴鹿四頭をも送付の筈也と〔全文〕

1912.09.27「土人馴鹿出発」

既報せし如くアイヌ四名は拓殖事務所の招ぎに応じ佐々木嘱託の率ゐられ昨日出発せり尚馴鹿四頭も同時に送付せり〔全文〕

1912.10.01「己れの領分だ／アイヌ六助の逸話」

今度拓殖博覧会の招に応じて上京したる東海岸小田寒のアイヌ板坂六助〔ママ〕について面白い話がある儘か四十二年の事と思ふ久春内より山越へして真縫より豊原に出る漁夫連れの三人が小田寒と相川の間に来蒐ると一頭の大鯨が海岸に打寄せ居るを発見したので飛んだ宝を見付けたものと二人は其所に見張りを為し一人は早速今日の栄浜当年のドブキー出張所へ拾得の届を為した此の届を受取つた出張所はその処分方を本庁へ交渉すると漂流取扱規則に依り競売に付せよとの命令依り吏員は現場に出張し競売せし処発見した三名が承知せず是迄鯨の漂着せし時は先づ発見者が三分の一を取り残りを其村中にて分配するが例であるのに発見者の効勞〔ママ〕を無視して只だに公売し全部国庫の有に帰せしむる法あると北海道の例を取りて中々に承知せず果ては打つても懸らん形勢に出張員は狼狽し取つて返へして其旨所長に報告し所長より再び樺太庁に伺ふと是非公売にせよとの事に今度は万一の乱暴に備ふる為め態ぎ態ぎ巡查二名を附して出張せしめしに偕てと現場に臨み見ると驚くべし山の如き鯨は散々に切開され上肉は悉く持去られ御負けに発見者として頑

守せし三名の漁夫さへ見へぬ始末に什麼した事と附近に聞けば一昨日の事小田寒の六助アイヌが大勢の郎党を引率し来り切り取つて持ち帰れるなりとの事に偕ても奇ッ怪な奴官有物を無断拐帯するからはアイヌだからとて容赦はならぬと其儘押蒐け其不都合を詰りたり(未完)〔全文〕

1912.10.08「両極土人握手」

拓殖博の土人手工場出場の樺太アイヌ、ギリヤーク、オロチョン、北海道アイヌ、台湾土人生蕃の六人種は五日午後三時参考館内にて握手会を催ふせり会は坪井博士の挨拶後、早乙女、佐々木(本嶋)吉岡三氏の通訳にて其意味を陳べたるに皆嬉々として握手し各自宅に帰れり(以上六日)〔全文〕

1912.10.09「始めて世界の広まを知った／拓博出場の珍客／本当固有の土人」

去る一日より上野不忍池畔に開会されたる拓殖博覧会に出場せし樺太土人北海道アイヌ台湾生蕃土人の内樺太側のギリヤーク人数香支庁内ホウエ村の酋長ボーコン(五十)妻チエクレン(五十二)及びプニオン(十九)敷香キューリン川の畔に住むオロチョン酋長パロフ(五十五)の四人は吉岡信平氏に率ゐられて二十九日午後八時上野に到着し車坂町旅館伊勢清方に入つた彼等は子供の時から強い酒を飲めば煙草も吸ふ現に類りにゴールデンバットを燻かして居た人を訪問する時には必ず手土産を持参する習慣で其品物の多寡に依つて應對に差異があるのが極めて現金である平生丸木舟で居村の近海へ行く位で遠く土地を踏み出さないのが、臍の緒を切つて始めての大旅行見る物毎に胆を潰さぬはない小樽へ来て這入つてからは氣候の激変に感じて居た三十日も普通では少し小寒い時候を一行は如何にも暑さうにして居たのでも知れる物々交換の旧慣も近來は貨幣を得る趣味を知つて來て従來馴鹿の多い程財産家と称されて來たのが、遠からず変化するのであらうと云ふ事だ出京させた目的は手工を實習させるのにある天氣都合さへ好くば博覧会場内へ彼等の住居を構造する筈であつたが氣候の関係から材料の蒐集に困難であるらしい今度の出京に當つてイバロクはカーキー色の背広プニオンは紺の背広服を着る事にしたさうな〔全文〕

1912.10.10「拓博の開館(続)／土人を囲んだ群集」

▲更に後庭の各土人の住家と土人とは実に拓殖博覧会

中最も人を呼ぶもので何人も一度は皆其家屋の中を覗いて見る

▲北海道アイヌは窓から覗かれても平気で何か木の皮で細工をして其の傍に娘が父親の仕事を手を助けて居た而して過日到着したギリヤーク、オロチョンの兩人種も午後から各其棲家と定められた所に入つて例の両酋長は堂々として観覧客を迎へて居るのであった〔一部〕

1912.10.10「土人握手会の後報／▽樺太アイヌの謝辞」  
六日拓博の土人握手会は樺太アイヌ、ギリヤーク、オロチョン、北海道アイヌ、台湾土人生蕃の六人種にて坪井理学博士は土人を来賓に紹介し土人に対し南北より集まり軒を並べて住むも心と心と近かざれば相距る千里なりと挨拶し早乙女、佐々木、土岡〔吉岡〕三氏通訳せるに何れも満足し樺太アイヌ立ちて謝辞を述べ嬉々として暗き握手を交換し余興として活動写真ありたり〔全文〕

1912.10.10「拓博の土人館／人気の焦点となれる樺太に特有の二種族」

一日から開催される拓殖博覧会にギリヤークとオロチョンの二種族を代表する人間が来た二十九日午後八時上野着吉岡信平氏附添一切の世話をしてゐるギリヤークは

▲酋長ポーコン と云ふ打見た処四十六七位だらう彼等には第一に自分の年齢が自分で分ら無いんだから厄介千万である身長は五尺四五寸位頭は支那人の弁髪のように長く背部に下げてゐる唯頭の頂辺を剃つて居無い処が支那人と違ふ位だ顔は黒銅色を呈し鼻下には立派な八字鬚を生やしてゐる着物は丁度支那人と朝鮮人との合の子のやうな者で緑色の上衣を前で合せて釦で止め其へ皮帯を締めてゐる皮帯を締めた処は大分露西亜に感化されて居るらしい下にはズボンの様なものを穿いて居る此種族は今では殆んど二百人位しか残つて居無い仕うしても太古の人間である然し之れも日本国を形成する一民族なのだ

▲妻君チクレン と云ふのが一緒だ之れは五十位のお嬢さんと銀環を両方の耳に飾つた処などは却々洒落れて居る頭髪はマガレットと云ふたやうに結んで居る浅黄色の筒袖の着物を前で合せてスカートの様なもの穿いた処は一寸妓生の様にも見える着物の周囲には黒い赤のビロード縁を取りスカートには金具をきらきら付けて居た此外に十九歳位なプニオンと云ふ青年が一緒に来たポーコンと同様な容子〔ママ〕を為て居た彼

等の言葉を二つ三つ書くと娘の事をサンカヘハラ父親の事をアツミチハラ、二人と云ふ事をドウナシと云ふさうなまだ此他に身長五尺六寸位な容姿堂々たる

▲オロチョン族 の酋長イヴロックが控えて居た赤味を帯びた頭髪を散髪にして光色燦爛ととして眼を奪ふ許りの大礼服を着用に及んで居る大礼服の上衣には龍と雲と波とを金糸で刺繍し袖は長く上衣も膝位迄あつた此大礼服は黒貂の皮十五枚以上と交換するさうだ日本の値段に換算すると□寸二百円以上に成る財産と云つては馴鹿位なもので大財産家は二百頭位を所有して居る彼等は火酒のやうな非常に強烈な酒を好む少しは日本語も出来るさうだ常食としては馴鹿、鮭、鱒、熊などを生のまゝ、食ふ時には蒸して食ふ事もある今は牛肉をシチウの様にしパンと一緒に食べて居る

▲アイヌの住家 には三人のアイヌが一生懸命に働いて居た細工物をして販売もすると云ふ北海道を始め樺太朝鮮台湾関東州など悉く整頓した椰子が茂り熊が歩行き漢人満人が佇立して居るかと思へば昆布の灯あり南大門あり台湾少女の美しいのがお酌もする却々面白い〔全文〕

1912.10.11「宛然殖民地に巡遊するの感あり／奇抜尽の余興館／三日より開館す」

朝来細雨靡々として霽□可くも非らざりし天候を物ともせず青山葬場殿より乃木將軍墓前に参拝の爲め上京したる地方人の拓博目蒐けて上野行電車は間斷無しの満員続きにて雨の拓博開館第二日は予想外の盛況を呈した

▲月明の夜の鯨漁 二日目より開館の筈で有つた余興館の殖民地活動写真は準備の都合にて此の日は試験的映写に止め、三日目から一般入場者に観覧せしめる事となつた、試映された写真は北海道と朝鮮を後廻はしにして樺太、台湾、関東州丈けで有つた、何れも殖民地の風光、殖産よりギリヤーク、生蕃等の風俗人情扱は生蕃討伐の実況など到底浅草あたりでは見られぬ珍しづくめである、樺太の部は最初汽船にて大泊に上陸し汽車に乗つて寒浪奇岩に激するアニワ湾を左膝下に望みて数千丈の断崖直下を進み一の沢二の沢の漁村に着□月明霜白き秋の夜の海原に建網曳く舟唄の『トーコイドツコイショ』の節も長閑に聴て海岸一帯鯨の山と化せば恰も戦場の如き光景と変じて大漁祝の歓声に湧き返へる壯観を偲ばせる、鯨漁は樺太に於ける物産の大半を占め二十万石以上五百万円余の巨額に上つて居る鯨の石数計算は凡そ米一石の重量と同一重量の鯨

を一石と算したので一石が約四十貫に相当して居る筈である

▲大森林と豊原市街 それより土人の遺跡で有名な貝塚を経て汽車は漸く樺太森林中に突入する、見渡す限り山又山で蝦夷松、とゞ松、落葉松等寒帯地方特有の良材密林をなして物凄い光景となる、面積に於て之れ等の森林は日本領樺太全土の八分余を占め総坪数三百三十万町歩に達し十五億尺メの良材之に繁茂し目下盛んに鉄道枕木として伐木されて居るので鉄道附近は行けども行けども之等良材は山と積まれて居る汽車の懸て豊原停車場に着し此所にて樺太庁及び大貴己命〔ママ〕外二種の神を祀れる官幣大社樺太神社其他を見物して再び汽車に塔ずれば汽車は又森林に入り進みてナイブチ川を渡り栄浜停車場に着く大泊より五十五哩、栄浜一帯の地は魚漁盛んに土民〔ママ〕多く居住して居る

▲土人の風俗と馴鹿 之より写真は漸く佳境に入つて土人の天幕生活より酋長バフンケが尺余の銀髯を撫しつゝ、此の写真撮映をされし時群集する村童等の生活をする所より橈を曳く樺太犬、露西亞式食器を用ひて、飯を喰ひ馴鹿の乳を呑む状態愛児を哺育する土人の妻山獵の光景、日本人と相親しみて会食する様などは蓋し見物人をして知らず北海の新殖民地に遊ぶの感あらしめる殊に馴鹿飼養の光景は最も興味深くタライカ湖畔の夕、土人小舟に棹して馴鹿数頭を引いて水に入り静かに波紋に送られて遊ぶなど得も言はれず、馴鹿は彼等が唯一の財産にして能く馴れたるは一頭七十円□値する、彼等が簡單なる天幕生活は折々此の馴鹿の背を借りて引越しをやるのである、結婚の折は唯一の結納として聳君は少くも四五頭を花嫁の家に贈る、若し非常の美人でも娶る時は十頭を贈ると云ふ

▲海豹島の臘腸獸 更に観衆を喜ばすものは此の栄浜海岸より便船して海豹嶋を見物する光景である、我が海豹嶋は露領と米領と世界唯三箇所の臘腸獸の群集する所で三国協議の結果政府の外捕獲するを得ざる事となつたが臘腸獸は七月より十一月の出産期に際し此の嶋に蟄集するもの七八千一万よりに達するので居るわ居るわ全嶋真黒に化して群り遊ぶ様面白く捲けば忽ち群を成して逆巻く怒濤を巧に遊泳するなど恐らくは第一の呼物たる可きか此の島には又背は黒く腹は白き海鳥と称する数万の海鳥群を成して飛び交はして居る此の鳥の産卵した卵は岩上一面に堆高く足の踏み処も無いとの事である

▲生蕃討伐の実戦 台湾の部にては昨年我が梅沢隊が

生蕃大討伐に向つた実戦を映写したもので海拔数千尺の巍峨たる山上を攀て糧食弾薬を運搬する苦心の光景より密林中に深く隠れて自没自在、討伐軍を苦ませる生蕃の部落、蕃社を目蒐け打ち出す山砲隊、弾丸命中して山間の蕃社は濛々たる黒烟を上げて焼失する壮凄の光景帰順式、權を以て船を漕ぐ如くにしてトロリーを走らす土人之に乗つて行く内田民政長官視察の一行、一行が奇岩に咽ぶ溪流を瞰下しつゝ、一本の針金を便りに対岸を渡る放れ業、愛国婦人より贈りし慰問袋に討伐隊野營の賑ふ様、綿火薬を用ひて討伐隊が伐木する光景、一丈に余る萱の竹の如きを押し分けて悪戦苦闘を続ける討伐隊苦心の状態ボンボン山其の他の風景等趣味津々として尽きぬ〔全文〕

1912.10.12「三大臣樺太少女の筆跡を貰ふ／拓博開館第一日の各大臣と松方老候」

南は台湾、朝鮮、関東州、北は北海道、樺太の物産を蒐め風俗人情を描きて茲に帝国殖民地の縮少天地を現出した拓殖博覧会開館第一日の盛況は別項記載の如くである此の日各省大臣は閣議を了りて後馬車、自動車〔自動車〕を駆って来館各館を視覧した

▲三相珍客を見る 記者は恰も林通信、長谷場文部、牧野農商務の三大臣が午後三時頃來賓館に休憩中其行に加つた三大臣共黒のフロックコート山高帽の軽快な扮装で左腕に喪章を附し主人役の鶴原定吉氏等と共に茶菓を喫しつゝ、珍客北樺太の土人四人と台湾の生蕃四人とを引見して居た三相は説明者の日本人に向つて種々なる質問を連発する赤字に金色燦として目も眩なる礼服を着込み八字鬚豊かに蓄へた生蕃酋長に先づ目を睜りたる林通信相は『生蕃自ら織つたのですか』と問ふ『之は支那人の手で織られたもので後等の大礼服です』と聞いて『成程』と三相等しく感心する、樺太土人の鱒の皮を赤き毛糸にて縫ひ合せた上着、マキリと称する小刀様の物を十二歳の少女まで腰にして居るなど大臣が好奇の眼をクリクリさせる説明者は『此の小刀はマキリと称して彼等常に腰にして放さず如何なる細工も此の刀一つにして巧にやつて居ります此の十二歳の少女は日本語を語ります』と云ふ未完〔全文〕

1912.10.12「拓博の人気を一手に集めてる馴鹿／▽珍奇なる北樺太の動物／▽土人の最も大切な家畜」

拓殖博覧会は二日も早朝より入場者で非常の混雑をして居る、特に各出品と毛色を異にして館内只一つの生ける動物なる馴鹿は殊に奥の庭にありながら人気を一

手に引受けてるやうに観客は皆不思議さうに此遠来の動物を飼つてある柵を取囲んで其長い角の獣を見てるギリヤーク、オロチョンを引率して来た吉岡氏を尋ねて此動物の話を開〔ママ〕

▲北樺太の二鹿類 樺太には内地のやうな鹿は棲息して居ない、僅に鹿の種類で棲息してるのは此馴鹿と麝香鹿との二種で麝香鹿は野生、馴鹿はギリヤーク、オロチョンの大切な家畜である、麝香鹿は野生である丈、余り多くは棲んで居らぬ此鹿の腹(俗に鞆丸)と云はる、処は麝香原料となるものを貯へてるので之を捕ると大分宜い値になる馴鹿は之に反して家畜で皆土人が飼養してるものである、土人の中でも多きは一軒で二百頭乃至三百頭も所有してる、馴鹿と云ふのは〔ママ〕アイヌ語でオロチョン人は之をウラーと称してる

▲温和有益の獣 馴鹿は土人の財産である土人は之を多く野飼いにしてる其放牧の場所はツンドラを云つて苔が五尺も七尺も堆積してる処で馴鹿は此のツンドラを常食としてるのであるが内地の草でも喜んで食してるのであるが今度も其食物としては此ツンドラの苔を持つて来て毎日之を与へてる塩水が好きで淡水の中に食塩を少し混じて与へると幾らでも飲む肉は内地の鹿の肉の臭気がなく味も美で乳は山羊の乳よりも濃い土人は此乳を搾つて飲んで、皮は鞣すと普通の鹿の皮の如く柔かで土人は此皮で股引、サルマタの如きものを作り更に雪中唯一の防寒靴になるケリは此馴鹿の脛の皮で作ると云ふことである

▲毎年一度の角 角は鹿の如く毎年一度宛抜け変わる目下の価格にして一噸三十円位で彼等の間には物々交換されてる土人は此の馴鹿を常に自分等の住んでる天幕の周囲一里以内に飼畜して常に番人を附して之を守らしてる然し柵も無く他人のものと雑居してるので之を区別する為めに土人はその角を切つて標章を附ける例へば上の角のないのは誰の所有、下の枝の短いのは誰の所有と云ふやうな事である、此の獣は頗る柔和で時々アイヌの犬に襲はれるアイヌの犬は頗る獐猛な奴で群をなして来襲すると忽ちに其一頭位を食つて了ふで、犬に襲はれると彼等は逃途を川の中に求めて泳ぎ去る面白いのは此の馴鹿が火を焚くと直ぐ其風下に集つて来ることで之は彼等を最も苦しむる蛇の類か烟の為めに追払はれるので之を目的に集り来るのである〔全文〕

1912.10.13「六人種観光館に握手会を開く」

拓殖博覧会内土人手工場に出場せる樺太アイヌ四名ギリヤーク三名オロチョン一名北海道アイヌ一家族三名台湾生蕃一家族四名は五日午後同会内観光館に於る人類学講演会を終りし後其握手会を挙行せり坪井博士は先づ右土人を来賓に紹介し次で土人に対し南より北より各異なれる地より来りて、斯く一園内に軒を並べて住むこと、なりしも言語通ぜず風俗を異にせる為め心と心とは遠く離れて相距る、と万里なり然れば本日特に一堂に会せしめ和親を結ぶ為め握手会を開きたりと述べ早乙女氏は之を生蕃に佐々木氏は之を樺太アイヌに吉岡氏は之をギリヤークオロチョン語に訳して其旨を語れるに流石の土人も其意を了したるもの、如く満面に笑を湛へて首肯きたり之に対し特に樺太アイヌ立ちて此好機会に吾等の新しき同胞と相知るを得たる上に和親を結ぶことを得たるは頗る喜ばしと述べ各々温かき握手の礼を交換したる後引続き開館せる活動写真を見樺太人は台湾の写真に生蕃君は雪多き樺太の写真に興味を遣り嬉々として各自の住宅に引取り〔全文〕

1912.10.13「三大臣と少女／拓博開館第一日樺太少女の筆跡を貫らふ」

▲文相と樺太の少女 長谷場文相は流石に教育的の興味を此の珍客に対しても感じたらしくつと立つて『文部大臣長谷場純孝』と記した名刺を出してそれに片仮名にて振仮名を施して彼の少女に読ましめた、北樺太〔ママ〕の土人と文相と相對して語るなどは一寸面白い少女は鈴の様な清らかな声を張り上げて一字も誤らずに読み上げた文相はいと喜ばしげに打ち笑みて其の名刺を少女に与へた少女は叮嚀に押し戴だいて懐にをさめる通相も農相もいと興ある事に思ひ文相の通ほり自分の名刺に振仮名して読ませて少女に与へる少女は又た前の通ほり押し戴だく文相今度は更に一葉の名刺と鉛筆とを取出して『お前の名前を書いて御覧』と言ふ日本語を少女は少しも聞き誤らず静かに頷いて手跡も美見に『ツボサハテル子〔坪沢テル子〕』と記した、三相顧みて『ウム上手だ書けるわと〔ママ〕通相も農相も名刺を出して少女の筆跡を貫ひ休憩所を出ようとすると坪井人類学博士とバツタリ出口で会つたので又引き返へして珍客の見物をする。〔一部〕

1912.10.13「樺太土人自動車で東京見物／帝都の大いに喫驚す」

拓博の樺太土人四名、七日は朝から自動車に乗つて東京見物をさせると前夜の宣告に喜んだの何のつて、雀

躍して『嬉しい嬉しい』を連発し其夜は碌々寝付かれず七日の朝は滅法界早起きして『自動車に乗るのは未だか未だか』と樺太出発以来付添居る吉岡信平氏に強請む

▲日本一の大将 用意の出来たのは午前九時、総員直ちに二台の自動車に分乗する、一はギリヤク種族のポーコン(四十五六)チエフレット(五十二)の夫妻と吉岡氏の三名、一はオロッコ種族のイバロク(六十位)ギリヤクのプキオン(十九)と東大理科大学人類学教室の理学士石田収蔵氏と爆音勇ましく会場を出発した上野より小川町、神田橋を過て二重橋外に下車二重橋前より皇居を拝観させた始めて自動車に乗た彼等は如何にも愉快気に沿道の光景を見ては独り微笑むだが、遠慮深い温順な彼等是不遠慮に『愉快々々』と狂喜する事をせぬ『面白い』と尋ば流暢な日本語で『ウム面白い』と感嘆する、流石に心中の愉快さが色□現はれて居る二重橋では一同を整列させて石田教授と吉岡氏と記者と三名交る交る畏くも 聖上陛下のまします所なる事と説いたが、彼等は天皇とか陛下とか言ふ言葉を知らぬ、唯一番えらい人神様のやうな人と言ふ観念は有るので『日本で一番えらい人』『王様、日本一番の大将』と恐れ多いが斯んな言語を用いて説明すると初めて会得したらしく『ママ』判つた判つた』と言ひ一同殊勝にも容を正して脱帽し一斉に敬礼した、彼等も我が仁慈なる 陛下の赤子である。

▲人が何人居る 初めて皇城なるを知つた彼れ等は好奇の眼を睜つて『一番えらい日本の王様は何所に居られる』『此の濠の水は着い、深いか』『何所から這入つて行くのか』と種々なる質問を連発する。それから楠公の銅像の説明を聞いて感心し『妙な着物だ矢張り日本人の昔の着物か』と尋く、馬場先門を出ると商業会議所、帝劇、警視庁其の他宏壮な建築物を見て胆を潰し『あの家の中に人が何人居るか』と奇問を發する、彼等が樺太に在りては百人以上の集団を見た事無ければ毎日拓博内の己等が棲家に居て群集する見物人を見ては『昨日来た人が今日も来たのだらう。斯んなに沢山人が居る筈が無い』とまで疑つた位で内地は人が多い』『ママ』と言ふ事が先入主になつて居るから大きな建物さへ見れば内に人が何人位居ると尋ねる、百人以上の集合を見た事は無くとも千、万などの言葉丈けは有る由だ(未完) [全文]

1912.10.15「樺太土人自動車で東京見物／帝都の大に喫驚す」

▲日比谷の池畔 日比谷公園に入ると水道の水を珍しがり、見た事も無き鳥類、草花等一々珍らしく珍奇な声を出し感嘆し互に相顧みてペチャクチャと語つては喜んで居た、松本楼で紅茶を飲み直ぐ側の池畔に出ると群り遊ぶ鴨が岸に近く群游して驚きもせず落付いて居ると喜び緋鯉を水中に発見した時はポーコン君、妻女のチエフレットを引つ張つて来て見せる、夏服を着ては来たか樺太の土用の内より暑いと一同落つる汗を拭いつ、『暑い暑い』で又も自動車上の人となる

▲家の多いに驚く 愛宕山に登付く『ママ』と同時に眼に映ずる市街の光景、一同声を揃へて『アッター』と驚嘆の声を漏らし『家が素的『ママ』に沢山集つて居る』と驚きの眼を剥き出して記者の袖を惹き品川湾を指して海!海!』と言ひ汽船を見出して『彼麼大きな船が此所まで来るか』と感心する、それより銀座に出で丸善の三階楼上でエレベーターには愈々驚いて不審かりエレベーターが下に降りて行のを上から覗いて自分が現在居る三階の高いのに恐れをなし『危険い危険い』と後退りする、茲でもお茶の御馳走になり四階から市内の光景を眺めて又『家が多い』と連呼する

▲次は三越見物 今度は三越呉服店に行く、いやもう其の美々しさに無性に興に入り、殊に女帯地には垂涎三尺、店員の案内で各室を廻り、電話室で受話器を耳元に当てがわれ、『聞える、聞えるが言葉は判らぬ』と言ふ、子供のポンチ絵や教育画の絵本を見ては色彩の美しさに一番若いフギオンが買ひたいと申出たので、二部宛お土産に買つて貰ふ、ポーコン君は小樽で海軍帽を買つて被り込み日本語は頗る上手で而も日本の片仮名位は読み且つ書けるので其の絵本の仮名文字を読んで居た、此所でも茶菓菓の御馳走を受けて午後零時卅分拓博の棲家へと引き上げたり [全文。無関係の写真あり]

1912.10.15「勇猛果敢なる樺太犬／拓殖博覧に於ける愛犬家の垂涎三尺」

開館以来人気沸くが如き拓博七日目は月曜日なるにも係はず非常の盛況を呈した今日は方面を換へて樺太館に附属する入口左手に飾られた犬籠に使用する勇猛果敢なる樺太犬の談を聞くに

▲奮闘力戦能く努む 樺太犬は樺太に於けるギリヤク、オロッコ両種族が馴鹿を唯一の財産とせる如く樺太アイヌが財産中の第一のものである此の犬は全身の毛色黒又は黒白の斑多く耳は短く尾は必ず巻いて居

る、元来動物は耳の長いのは勇猛で尾の長い程臆病で有る事は彼のブルドックと兎とが好適例で耳の長いのは敵の襲来を最も早く知り得る自然の保護である而して又尾の巻いたは力の強さを表現したもので有る事は動物学者の説く如くで樺太犬は此の二つの要件に最も能く適応したものと云ふ可く遠吠などせず敵に近い後一挙に勝を制するなどは全くブル式である、然れば土人は之を熊狩に使役する獯猛なる熊族と相対すれば力に於ては引き裂れる事は彼自身も自覚して居るのだが主人の命なれば死を決して奮闘する熊は何をとばかり一声の下に粉碎せんと後足にて立ち上る其の瞬間獵夫の手にせる小銃の火蓋は切つて放たれ、熊は遂に斃れるのである

▲忠実に主に使ふ 而し此の犬は熊獵よりは橇を曳かせる犬として最も多く使用されるので彼が北海の吹雪逆巻く深山を物ともせず橇を曳く状態は拓博内の模型其儘にて橇一台に十頭より十二頭を普通とし冬期雪上氷海の上に唯一の交通運搬の機関となって居る、普通七十貫の重量を一日三十里の外に運ぶ力を有して居るので露領時代には南北樺太の郵便物運搬にも使用して居た、十頭乃至十二頭の内にても先登〔ママ〕に立つ一頭は其の値一頭数十円の高価にて力強く能く之を取する者の命令を理解し馭者が取る方向舵を些の誤りも無く先導し行くのである、舵の外主人がアイヌ語にてトウトウ(急げ?)クワイクワイ(曲れ?)など其他極めて単簡〔ママ〕なる命令語を能く解して居る食物は常に乾魚其他主人と食を同うして居るがいざ今日は橇にて出発と云ふ日には其の前一度食を与へたるのみにて目的地に達するまでは決して食を与へぬ、満腹すれば動かぬ為である

▲財種家は犬三四十 橇は幅二尺二三寸長さ廿尺位にて船の形をなし其の底には滑走に便する為め必ず鯨骨を用ひる橇に乗るアイヌ等は彼等特得〔ママ〕の狐の皮の帽を戴き足にはあざらしの皮の満洲式長靴を穿ち腹及び腰を同じ皮にて包み更に両足にスキーを付けて橇に跨つて疾走する、方向舵は両手及び両足を以て操縦する如何なる險阻も森林中も吾等が平地を行くが如くである、斯くて春秋両季に入れば熊獵にも使役するのである、樺太アイヌは殆んど毎戸之を飼養する状態にて多きは橇二三台と犬三四十頭を所有し以て彼等中の財産家と称せられるのである〔全文〕

1912.10.17「拓殖博樺太館／△人氣殆んど樺太館に集る」

△土人 土人手工館は本会の計画するところにして其状況は曩きに詳報したり而して本嶋の土人としてはアイヌの外ギリヤークオロチョンあり其人種の多き第一位に居る殊にアイヌの刺繡ギリヤークの木皮桶製造等各独特の作業を実地に見分せしむる事と□興味更に多からむ

△活動

活動写真亦本会の催□か、り本嶋の実景としては鉄道沿線臘肭獸、馴鹿等ありフィルムの長さ実に二千尺に及ぶ〔一部〕

1912.10.17「生蕃觀光団と樺太アイヌ」

生蕃觀光団は十二日拓殖博覧会を參觀し館内に居住の生蕃チュワス一家と異郷の奇遇に一目見るや互に目に涙を宿し無事を祝しチュワスの家を見て『お前はもう台湾に帰らぬつもりか〔ママ〕と悲し気に尋ねたるに同人は『いや今度月の出る頃には必ず帰るから老父や兄きによく云つて呉れ』など、答へ鬼の如き彼等にも人情の变りなく引卒〔ママ〕の警官も同情の涙を禁じ得ざりき夫より觀光館にてアイヌの活動写真を見其風俗の奇なる又は臘肭獸の大群集等に総立ちとなりて愉快を絶叫し尚愛奴と会見して互に奇異なる姿に眼を睜りギリヤークの服装を見ては支那人に似たりなど、評し其美髯を珍し気に見やり夫より名残を惜しみつゝ退出したるが彼等を見たる樺太愛奴の坪沢老人『は〔ママ〕日本政府もこんなのが沢山あるので世話が焼けるのだ』と納まり返り居りしも可笑しく又彼等を見物せんと集まれる群衆頗る雑踏し混雑烈しかりし〔全文〕

1912.10.20「生蕃觀光団拓博の生蕃を訪なふ／無事かとはばかり相擁して泣き樺太土人アイヌ等も一堂に会す」十二日生蕃觀光団四十三名は飯島、今澤両警部以下数名の巡査に引率されて午前八時頃旅宿なる麴町平河町の繁星館を出て今日も珍奇なもの美しい所を見物出来ると聞いて嬉々として互に語り合ふて打ち興じつゝ、先づ二重橋前に出で畏くも汝等を赤子の如く慈み給ふ神の如き日本帝国の至尊陛下は此所に在すのだと説き聞かされて一同整列して一斉に敬礼し「立派々々」と感心して白木屋を見て拓博に向ふ

▲奇遇を喜び泣く 拓博内に居住して居る生蕃パットチュワス夫婦は早くから此の事を聞いて待ち兼ねて居た事とて親子五人打ち連れて会場を出で途中で一行を迎へる一行はチュワスのウライ社附近の連中にて、ユワス〔ママ〕とは予ねて知己の間柄である、シーラン

ワット外二三名が居つたので一目見るより早く互に眼には涙の露を宿して『チュワスお前に本に行つたと聞いたが何所へ行つたかと思つて心配して居たが此所に居たのか、それでも体に変りは無い』かと言へばチュワス夫婦も奇遇を喜び涙を流して『体には別に変りは無いよ安心して呉れ』などと打ち語りつゝ、拓博内のチュワスの家を見て東京の真中に己れ等の家の有るに驚きチュラス〔ママ〕をおつ取り巻いて『チュワスお前家まで作り子供も連れて来てもう台湾へ帰らぬ積りか』と悲しげな顔色をして語る『ナーニ帰へるよ月も変つて又月が出る頃には用が済むから爺父や兄哥に無事で居るからと言伝へて呉れ』と言ふ鬼の如き彼等にも斯んな美しい感情の血潮は其の鉄の如き五体に流れて居るのである

▲余興館の奇観 夫から余興館に入つて活動写真を見る樺太の土人ギリヤーク、オロッコ、アイヌ等の風俗やら馴鹿、湖水の漁舟などに頗る興がつてウエウエターライカイ(オヤマア)を絶え間無く連呼する殊に一万余臘腸獣が海豹嶋に蝟集して岸に碎くる怒涛に遊泳する様を見た時は一同総立になつてウエウエターライカイを絶叫する、一回済むと入口で貰つた記念写真帳の外に此所では彼等の好きな日本酒と巻藁の御馳走になり良い気持ちに酔つて居る所へ帝国装飾会社の三井氏から塩煎餅を貰ひ会場内に居住して居る樺太のギリヤーク三名オロッコ一名アイヌ四名とがやつて来て向合ひに座を占める樺太連の方は開会以来場内の蕃君と懇意になつて居るので大して驚かぬが余り多に仰天したがギリヤーク先生記者をとらへて沢山来たな生蕃皆か〔初めの『なし』と尋くアイヌも『生蕃もたくさん居るんだな』と感心して居た生蕃連の方では始めて見る事として日本人じゃ有るまい『矢張り吾々に似た蕃人か』などと考問を發し説明を聞いて成程と合点しギリヤークの服装を見て『支那人に似て居る』と評しアイヌの美髯を珍しが

▲郷里へ言伝 余興館を出で館内を一周し動物園に行つた猿は例に依つて最も彼等の興を惹き獅子、虎、熊、扱ては金魚など見るもの総て驚きの眼を睜つた、拓博を見た時もチュワス夫婦に残り惜し気に見送つたが妻は流石に女で有るオーガツミツネポーベ(病氣は無かつたか)と尋ねられたことを思ひ出してか(実はパイパイバット(当歳の女兒)が熱が出たが大した事も無いから唯無事だと言伝へて呉れ心配するから)〔括弧の不一致〕と言ひ『米の取入れ時から盗まれない様と言ふて呉れそうしてお父さんや兄さん達で取入れて置

いて呉れ、ば帰つてから相当の礼をすると是非言付けて呉れ』と諄々と郷里への便りを頼む、やつぱり女は女である斯く観光団側の一団は動物園でも茶菓の御馳走になり夕刻宿に引き上げたが十三日には浅草見物と洒落れるさうだ〔全文〕

1912.10.20「テル子の大繁忙／拓博樺太の美人寒い日の好対照」

十一日の拓博は今にも降り来らんず〔ママ〕天候なりしに係はず朝来非常の盛況を呈した勿論十日には天気予報が降雨と有りし為め入場者頗る減じたと云ふても一万五千に近く十一日も亦一万五千に達した快晴の日の三日日曜の五万以て其の人気の素晴らしきを窺ふに足る朝鮮入口の朝鮮門、虎、其の反対のかわに在る樺太犬と橇、台湾館入口の阿里山の檜を以て作つた日本式の門、台湾館の大壁画、朝鮮人參と砂金、関東州の鶏冠山砲台日露戦役当時の惨状、朝鮮慶雲宮内の慶会楼、樺太の丸太の家、自然林中の各動物其他例に依て一として観衆の眼を惹かぬは無く生蕃、北海道アイヌ樺太アイヌ、ギリヤーク、オロッコ等の土人は恐らく場内第一の呼物で余興の活動写真も新に到着した北海道を加へて這入るは這入るは満員続きの大景気、殊に海豹島に於る万余の臘腸獣大群を成して遊泳する様なぞは割れんばかりの大喝采を博して居る生蕃は朝来の寒風に顫へ上つて焚火に暖を取つて居て一向表に出ぬので見物人は『出る出る』と怒鳴る、一方には樺太の連中『今日は丁度いゝ時候』だと言つて居る南と北と此行□会してこん□面白い対照をなして居る、樺太方面アイヌオタサンの酋長坪澤六輔〔坪沢六助〕の娘テル子さんは拓博記念帳売場に手伝ひに来て居たが記念帳を買ふ女学生から署名して呉れと望まれて筆をとつて筆跡鮮かに『ツボサハテルコ十二歳』と記してやつたので之を見た群衆は吾も吾もと記念帳を買つて書いて呉れと強請むのでテル子さんの忙しい事それでは可愛そうだからと『テル子』とのみ記させる事にしたがそれでも間断なしの御註文にテル子さん一向に驚かず書いてやつて居た、其翌日からから二百部に限つて書いてやると言つて居□テル子さんは東京でも珍しい程の美人で日本の姉さん達に可愛がられて大の人気娘である、ギリヤークのプニオン(一九)君も退屈凌ぎに記念写真帖を売つて居た樺太アイヌのお嫁さんも売る買ふ人共瞬く間に五六円も売上げた日本語が上手な丈けにお客さんに対して少しも不自由せず売る人も買ふ人も面白がつて居た。〔全文〕

1912.11.01「土人一堂に会し/て唄ひ且つ踊る/拓博樺太アイヌの/落成移転の大祝宴」

拓博の樺太アイヌは二三日前まで仮小屋に住居して居たが過般樺太で買ひ入れた家の材料が到着したので主人公の酋長坪沢六助君監督の下にアイヌの棟梁チュコモリ君が日本大工三名を指揮して廿三日落成直ちに移転して其の夜場内の生蕃北海道アイヌ、ギリヤーク、オロッコ等□招待して大祝宴を開いた飲む程□呻ふる程に唄つたり踊つたり此所帝国の南の端から北の端まで御他人の打ち交つての芸比べに歓声堂に充ちて破天荒の珍現象を現出した

▲祀りと料理の役 さあ今夜はお客さんだと云ふので嫁女のチカマさんは甲斐々々しく御馳走の用意をする一方主人の六助翁は手伝に來た北海道アイヌのウエサナシ君及棟梁つ〔ママ〕チュコモリ君と共にイナヲを家の内外に立て、天地の神を祀り且つ祈る其中にアイヌ部落特有の乾し鮭を名物として牛肉に馬鈴薯を入れ味噌の混合煮と特に菓子料理の出来て酒は日本酒の上等で珍無類の会合が始まつた

▲酒宴始まる 午後六時頃になつてお客は全部集まつた生蕃親子五人、ギリヤーク〔ママ〕オロッコの一隊五人、北海道アイヌ三人を始めとして早乙女、吉岡佐々木の各附添監督者、事務所よりに〔ママ〕筒井、中尾、藤井氏外数名理科大学人類学教室の石田理学士、各土人語研究の為め毎日拓博通ひをして居るアイヌ語専門の金田一文学士それに日本大工三名を加へて総勢凡そ卅余名、室の中央半坪ばかりの炬を押つ取り巻いて車座にずらりと並ぶ、猪口は一人に一個宛行き渡りそろそろ酒宴に移つた且つ飲み且つ食ふ程に主人六助は突と立つて神前に備へた〔ママ〕ドウキ(五合も入も〔ママ〕大盃にて木製漆塗)をタカイサラ(同じく漆器の盃台)に乗せたま、持ち來り己れ先づ満々と注がせて左手に之を掲げて右手に竹籠の如きものを持ちて其の先を酒に浸して神前に滴らし神に捧げて後其の竹を以て鼻下の美髯を上方に搔き上げて凡そ三口程に呑み尽して一同に其の大盃を廻す

▲アイヌの唄と踊り 祝宴の場合のアイヌの儀式だが扱て他の土人連には一向そんな事には頓着せず兎も角も満を引いてグッと呑み干す美事〔ママ〕な事、之に比べては内地人の貴賓として一段高い所に坐つた筒井氏始め面々なかなか此の大盃を受け切れず此の所豪酒の太刀打には聊か後れを取つたりと相見えた儀式の酒も済めば之からは無礼講となり棟梁先づ美髯を撫し

て氣遣〔ママ〕を唄へば主人の六助君起つて盛んに踊るアイヌの唄にアイヌの踊意味は薩張り判らぬが一同腹の皮に振れる程に面白ががつて〔ママ〕大喝采暫しは止まなかつた歌は『神に捧げた酒の残りを吾々一同が頂戴する頂戴出来るのは皆神の賜です〔ママ〕と感謝の意を表したものだ由だ

▲各土人の即吟の唄 唄■踊か済むと盃■人方から降つて二人は盃攻めの重囲に陥入り次に生蕃は顔色に似も付かぬ美音を張り上げて『オレン、ベンセパカン、マラホウ、ワトノシレタタノヤサ……』と唄ひ出して万葉調を帯びた其の節の優美な事余韻嫺々として尽くる所を知らず一同寂として酔へるが如くであつた歌の意味はオレン、ベンセパカレマラホウ即ち先祖の神の大將の恵を受けて家内安然〔ママ〕無事で斯うして日本に來て色々珍しいものを見る事が出来るのはどんなにか幸福であらう云々と云ふ即吟だ由だ次いでオロッコもギリヤークも同じやうな意味の即吟を立つて唄ひ且つ踊る喝采は止む間も無い北海道のアイヌのバッコ(お婆さん)コレヤタニも興に乗じて唄ひ出した愛嬌の有るニコヤカナ顔と細い細い十四五の乙女のような素的な喉を聞かせてヤンヤと賑ふ六助翁堪ら無くなつて又起つて踊り出した

▲鳥の立つ踊り と又今度アイヌのバッコはシトリと云ふ鳥の立つ時の踊りを自ら唄ひ且ひ〔ママ〕踊つた両手にアツシの袖口を取つて羽ばたきを真似折々其鳥の鳴く音其の儘にフアフアと言ふ面白さに歓興〔ママ〕尽くる所を知らなかつたが更に次会を期して散会した、扱ても珍しい会合かな〔全文〕

1912.11.03「拓博の土人歡喜首相を迎ふ」

二十三日の拓殖博覧会は西園寺首相の一行と百四十名の朝鮮觀光団とを迎へて館内殊の外賑ひを呈した

▲首相の來館 午前九時四十分黒の背広に中折帽子と云ふ至つて瀟洒たる服装をした首相は文展の見物を済ませて黒田清輝氏らを伴ひ自動車で來着された吉植、奥氏等博覧会幹部諸氏の出迎を受けて第一に台湾の出品から見物され、総督府出張員の説明で一々詳細に聴取され続いて館庭に在る台湾喫茶店に立ち寄られて紅茶の饗応を受けられ台湾南北の風物産業の模様なぞに就て色々の批評を試みられた折柄土人の少女五名が年嵩な婦人に伴はれて首相の前に出て丁寧な御辭儀をすると首相は余程御機嫌に叶つたと見えて『帰り度くは無いか寒いだらう』など、質問された娘等は皆な十歳前後の至つて無邪気なものばかりである笑靨を見せて

『別に帰り度くはムいせん内地の方が宜うムいます』と答へたれば更に首相は『折角身体を丈夫にするが可い』とて一少女の捧ぐる一椀の茶に舌鼓を打たれ臆がて筒井氏の案内で更に樺太土蕃と北海道アイヌとの住居を訪問された

▲蕃族の歓喜 ギリヤーク族オロチョン族等の一家は何れも此光栄に歓喜して、悉く部屋の入口に首相を出迎へた首相は彼等に親しく言葉を掛けて『寒くはないか身体は健康か』と丁寧と遠来の労苦を稿らはた[ママ]ので彼等は身に余る喜びを添へて感謝の言葉にも困つた様子だつたアイヌの妻は立派な内地語で『寒くも無い帰り度くも無い慣れたから別段恐しくも有りません』とて其青い刺青のある口辺を撫てみた台湾生蕃の小屋では首相の来臨と聞いて年増の主婦さんが頻りに機織りをしてゐる青だの紅だの白だの色々の糸を見事に織りなして出来上つたらば大人に献上したいと云ふ首相は蕃婦の篤き志を心から感謝されたらしく帽子を取つて有難う有難うと云つて此処を出られた

▲アイヌ首相と語る 続て樺太アイヌが昨晚新築祝をした丸太作りの小屋を見舞はれた真黒な丸木を組み合はした穴のやうな処を潜つて部屋の内へ這入られるとアイヌ夫婦と美しいその娘は珍らしいお客様の来訪に逢つて今更のやうに驚いたらしく石田理学士等の指図でをづをづ挨拶した新築祝ひの名残と見えて正面に餅だの幣だの飾つてあつた斯くて関東州、北海道、朝鮮等順次に詳密な見物をされて正午少し前に退去されたが首相が拓殖に関する熱心とその丁寧な態度は尠なからず一同を感動せしめた[全文]

1912.11.08「拓博土人へ菓子料を賜はる▽米田侍従の視察」

天皆[ママ]陛下より御差遣相成りたる男爵米田侍従は既記の如く卅日午後一時拓殖博覧会に着し奥田会長の案内にて朝鮮館、北海道館、関東州館を順次詳細に視察し台湾喫茶店にて少憩の後更に樺太館、台湾館を視察し一々各館の当局者説明をなしたるが侍従は最も詳細に陳列品に付き反覆訊す処あり終て階上なる人類学室及び三階の陳列品を参観したり当日天皇陛下には出場の土人の上を思召されか畏くも菓子料として金百円を土人に賜ひたれば土人等は階上の一室に集りて御礼を申上げたり尚ほ博覧会より侍従を経て左の品々を陛下へ献納したり

台湾人製作通草紙製造花▲台湾蕃人製作織物▲北海道アイヌ製作木彫盆及アツシ袋▲樺太アイヌ製作刺繡▲

オロッコ製作馴鹿橇雛型▲ギリヤーク製作舟の雛型並に献品製作者及家族写真絵葉書[全文]

1912.11.09「拓殖各土人へお土産」

東京の香蘭女学校生徒は去卅一日拓殖博覧会を参観した其折生徒より出場の土人の子供等へ土産として生蕃のユーミンパットにはサーベル其妹に人形、又北海道アイヌの娘には下駄樺太アイヌの伊沢[ママ]テル子、[ママ]へはリボンと夫々贈物があつたので何処の子供も大喜をして居た、[全文]

1912.11.09「東宮拓博御成／各植民地の風俗産物に御趣味深く／三時間に渡りて御熱心の御見学」

東宮殿下、淳宮、光宮三殿下には既電の如く三十日朝七時卅分上野不忍池畔なる拓殖博覧会に行啓あらせられ学習院生徒二百余名と共に三時間に亘りて御見学の為め同会各館を御巡覧遊ばされたる後御機嫌いと麗はしく十一時三十分御還啓遊ばされたり

▲三殿下時着 六時五十分といふに青山御所を御出門あらせられたる東宮殿下及び淳宮、光宮三殿下には御予定の如く暁靄尚ほ池畔に罩めたる七時三十分半ば枯れたる不忍の蓮に滴露潜々たるを打見やり給ひつゝ、東宮には一條侍従長と御同乗、次いで両皇子御同乗にて波多野東宮大夫、村木侍従武官長、丸尾、土屋、作間、松平御用係供奉にて御三方とも学習院制服にて金紋鮮やかなる御馬車颯々として淨砂打敷かれたる博覧会正門前に向はせ給ふ、是より先き元田拓殖局総裁、江木、宮尾両部長、奥田博覧会長始め幹事井上角五郎、早川鉄治、吉植庄一郎、筒井、川路両監督始め職員一同御出迎へ申上げ更に学習院職員等に率ゐられて先着の山階宮、久邇宮、華頂宮各王子を始め学習院生徒二百六十名正門に整列して一同と共に奉迎申上げたり  
▲総て御記憶に止めさせ給ふ 御聡明感佩すべし 東宮殿下始め淳宮、光宮二皇子、山階宮、久邇宮、華頂宮各若宮殿下には石井教授の御説明にて仔細、御巡覧遊ばされたるは悉く御記憶に止めさせ給ふも殊の外御感に入りたる折々の御模様を拝観すれば台湾館に入るや先づ聳え立てる

▲阿利山[ママ]の檜門 を御覽ぜられ『大きな門だナア』との御言葉あり、果物の前に立ち給ふては『皆な台湾の果物は大きい』とて玉の御手に取らせられて周囲の人々に示し給へり、種々なる生蕃の武器に対して石井教授は質問のご教授申上しに三殿下ともいと御聡明にお答へあらせられしには何も感佩の外なし蕃人の

船に向はせられては一々御点検あり『此船んは釘が用つて無い』と仰せられしには御詮索の御頭脳恐懼の外なかりき、夫れより台湾全土の模型、塩田、農産物、海産物、森林等の各部にて塩、樟脳等の製法に就て詳しく御説明申上げしに悉く御会得あり例の大蝦は頗る御感に入りたる物の如し動物標本に向はせられては『あれはオケラ此れは何々』など互ひに指示し合ひて興じ給へり、又た台湾土人同学年生徒の成績品を御覧ぜられハルムクリンが画きたる狸の絵には『旨いのう〔ママ〕』と御賞讃遊ばされたり

▲山猫は強からう 夫れより樺太館に入りアイヌの用ふる器具に付仔細に御点検あり彼等が用ふる三味線の形いと可笑しきには声を上げて御失笑あり、平素より動物類を好ませ給ふ三殿下には教授がアイヌの幣など御説明申上ぐるも御もどかし気に剥製の馴鹿、山猫、スリ、雷鳥、白鳥などいろいろの動物の前に走り寄り給ひ、〔ママ〕山猫は強からうナ』と其の獐猛なる形に見入り給ひ又た日露境界線石標には年々名も知れぬ鳥の渡り来り尾を露西亞に向け頭を日本に向けて棲むとの説明標を御覧ぜられ今更の如く吾が国の尊きを感じ給へるが如く拝せられたり

▲土人を労はり給ふ 後庭の馴鹿群を御覧ぜられ三殿下には御手づから牧草を投与せられギリヤークの馴鹿に乗りて諸種の芸を演ずるを喝采遊ばされ夫れより一々土人の棲家の穢くろしきをも厭はせ給はず立入り給ひ其の生活状態を御覧ぜられ殊に生蕃の児童等には深く御眼を止めて御労はりの御言葉まで給はりたり、活動写真にてはオットセイの幾万となく群り棲める、海豹嶋の実況には『面白い面白い』と御喝采ありたり

▲御疲労の御色なし 朝鮮館にては模型の前にて熱心に御覧あり『曲玉のある処は父様がお上りになつた処だ』と先年 今上帝御上陸の仁川を示し給ひ鉱物標本の前にて淳宮殿下には手を触れ給ひ『アッ手が真黒になつた』と笑はせ給ひ関東州にては東鶏冠山の模型を御覧ぜらるゝや『鉄条がコンなに破られてしまつた』と仔細に御覧あり三時間に亘る御見学にも更に御疲労の御模様なく関東州より出で、台湾貴賓楼に至る途中朝鮮疫病除けの『天下大將軍』と書きたる人の首を附けたる柱をお目に止め給ひ『コレは何ぞ』と御質問あり『あの首は閻魔だ』と仰せらる

▲台湾貴賓楼 にて御休憩の後再び正門左側なる名和昆虫所出品の虫類京都平瀬出品の陸上貝類標本を御覧あり朝鮮、北海道、関東州の各館を御覧の上本館楼上に成らせられ人類学上の諸標本文書等を御覧ぜられ更

に三階にて樺太協会出品の考古書類及び本派本願寺布教団東洋協会出品古図等を御覧ありたる後奥田会長より謹んで献納品を奉りたるに殿下には博覧会職員等に対して優渥なる御言葉を賜ひたり

▲土人製作品の献納 皇太子殿下啓の砌り拓殖博覧会より同会楼上にて献納し奉りたるは左の品々にて土人等が殿下啓の趣きを拝承するや雀躍謹んで製作したる種々の製作品は面白き品々よとて殊の外御嘉納あらせられたりと洩れ承はる

一、籐籠 生蕃パットチューワス製作

一、造花 台湾土人呉炳文製作

一、薄草紙 同慮氏銀製作

一、端書入函 北海道アイヌ貝澤ウゴサナシ〔ウエサナシ〕製作

一、舟 ギリヤーク族ボーコン製作

一、刺繡 樺太アイヌスクタリー製作

一、写真 関東都督府製

一、絵端書〔絵葉書〕 同

一、絵端書 東洋拓殖会社

一、絵端書 樺太庁製

一、苹果 北海道出品協会採取

一、バナナ、台湾総督府採集〔全文〕

1912.11.23「人種懇親会が与へた効果／小松小浜両氏の談」

去る九日午後六時より拓博の主催にて催はした人種懇親会に列席せられた小松通信次官は其感想を語て曰く拓博は今迄あり触れた博覧会や展覧会と其趣を異にして誠に趣工〔ママ〕の好い立派な者である由だが尤も開会以来随分入場者もある由だが尤もだと思ふ、恰度時候も佳いのだが丁度先帝陛下の崩御後人心の消沈している居る時に此会を開いた為め之か外の騒々しいものとは違つて殖民上にも教育上にも裨益あると同時に亦先帝陛下の御威徳を具体的に表示したもので誠に其の時を得たものであると思ふ、殊に一昨日の懇親会の如きは実に趣味津々として云ふべからざる感興に打たれた、実際東京で蕃人の偽はらず飾らざる歌や踊りを見ようとは夢更ら思はなかつたが九日の会で遺憾なく彼れ等数千里を隔てた南北両地の土人の歌や踊りを見て、実に面白く可笑しかつたが斯様に彼等遠方より来つた土人達が多勢の内地人の前で赤裸々に無邪気に躍つたり跳つたりしたのは之れ彼等か唯酒を飲むで酔つたからだとのみ思ふてはならぬ、彼等が内に邪心なく懐疑なき為めに酔ふたので畢竟彼等土人に我内地人の真

意が了解せられて親しくなつた為めである之も此拓博といふ一の媒介物によつて其効果を見る事が出来たのであらうと思ふ

此拓博の開かれた為めに彼等蕃人をして内地人を了解せしむることに大なる便利あるのみならず南北両地の土人が共に日本国民であるから親交を結ばねばならぬと云ふ観念が出て来るに違ひない

何にしても此拓博は啻に内地人に我殖民地の実情を知らしめて我国に殖民思想を喚起することに利益あるのみならず、又彼等蕃人をして我内地人の真意及び事情を知らしむるに利益ありと思ふて大に此度の挙を賛成して且つ其成功を祝した訳である、同じく当夜の懇親会に列席せられた警視庁小浜第二部長は曰く、拓博は確に大成功であつた此催しが殖民上教育上に及ぼした裨益の大なることに就ては最早多くの人々が云はれて居るから自分は今更改めて之が称讃の辞を呈しないが九日の人種懇親会に招待せられて列席した処実に面白かつた、近來稀に見るの愉快を感じて腹の皮を捻つた實際斯かることは空前で実に教務が多い見給ひ数千里を隔てた我国の新版図の南北の土人一堂に会して互に握手し献酬し内地各種の階級即ち上は大臣から下は俳優芸者に至る迄各種の階級を網羅し互に胸襟を開て毫も障壁を設けず大に打寛いて快談歎笑し盃の廻るに従つて南北の土人は酔ふて歌ひ出し遂には誰も勤めないのに自ら舞台上に飛び出して得意の妙技を躍り出すに至つては其天真爛漫で且其滑稽なものには一同抱腹絶倒して自分も覺えず痛快を叫んだ、之は唯一時の座興として面白いといふのではなく彼等蕃人が我々内地人の厚き同情の有る処を知つて大に喜び自分も日本人であると云ふ観念を以て何等の城府をも設けずに興に入つたもので誠に結構なことであるが此会が終つて後彼等が南や北に袖を別つて歸つた後は大に内地人の同情あり親切あることを吹聴して益々皇沢に霑ふと同時に樺大人[ママ]も台湾人も共に陛下の赤子であることを知つてお互に親しみを感ずる様になるに違ひない、自分は此会の如きは確に殖民政策の上にも教育上にも多大なる効果あることを信じて此会の為めに努力せられた諸君に感謝して居る[全文]

1912.11.23「拓博人種懇親会／各地の蕃人連と内地人と何れも一堂に歌舞宴遊す」

九日午後六時から拓殖博覧会の観光館内の土人懇親会が催された、南は台湾から北は樺太の端の端までの各土人を中心にして内地人は國務大臣から下つて俳優芸

者に至るまで各階級の人々を残らず網羅した千余人、飲む程に喰ふ程に感興自から湧いて唄ふ踊るわ生蕃美人の尻放踊、アイヌ老婆の鳥の踊果ては笛やらドンコリユー(五弦琴)やら満堂笑声の絶間無く腹の皮が捻れてお臍が宿換へをすると云ふ珍妙無比の盛況を呈した

▲七人種一堂に会す 六時來賓一同が活動写真の樺太海豹嶋に群衆せる万余の臘腸獸の壯觀やら朝鮮官妓の踊などに奇異な眼を睜つて居る所へゾロと這入つて來たのが真裸に赤い布を巻き付けた素裸足の生蕃ハットチュワス君と妻君の美人ピスイヤゴ……次女のパイバット(一つ)を背負つて長男のユミンバットと長女のチュワスパットを具して居る之れに続いて樺太ギリヤーク族の統領ボーコン、同人妻サンカ、青年ブキオン、オロツコ族の統領エバロク、樺太アイヌ、オタサンの酋長坪沢六助同人嫁チカマ、娘テル子、大工のチューコモイン、北海道アイヌの老翁貝澤ウエサナシ、老嫗南邊澤コレヤアタン台湾土人牧草商呉炳文の六人種が中央に座を占める、内地人を加へて七人種扱て之から愈々開会と有つて主催者たる理科大学教授坪井人類学博士が簡単な開会の辞として『等しく我が至聖至仁なる陛下の赤子である、日本帝国の国民である斯く一堂に会して且つ語り且つ飲む事は実に愉快である之れが本会主催者の希望であつたのだ』と簡単に述べて壇を下だると樺太アイヌの坪沢六助君つと立つて壇上に現はれた

▲アイヌの演説 拍手は急霰の如く流石に広い館も裂けんばかり六助君は六十余歳の老体ながらくわくしやくとして壯者を凌ぐ頑丈作り、アツシ裕に着なして胸を埋むる美髯を撫しつ、静かに聴衆を睥睨する、六助君は其の昔樺太が嘗て吾が領土なりし旧幕時代江戸の役人水上忠太夫に仕へ一度び主に従ふて江戸に來り五日間滞在したる事さへ有り、今はオタン[ママ]の酋長として非常な名望家である流暢な日本語で開口一番『私等は拓殖会に來て東京見物を出来るのさへ嬉しいに今日は又日本の南の端から北の果まで各人種が此所に集つて共に楽しい会をする事は此の上も無い合せであります、一同に代つて御礼を申し上げます』と怯まず憶[ママ]せず言ひ終つて壇を下ると喝采は暫し鳴りも止まなかつた、続いて奥田拓博会長の挨拶が有つて階上の食堂が開ける原大臣、内田外相も芸者も女優も土人も入れ乱れて同じ御馳走を頂戴する何だか同じ国民が何の距も無い斯うした様を見ると無性に嬉しい感じがする

▲アイヌの踊 素より無礼講である、盃は八方に飛んで飲むは、食ふはわけても土人連を見てれば紅裙連の一隊腕に捻をかけて差しつ押へつ片や大臣やら学者やら文士やらとの間に斡旋する、内地人酒豪多しと雖も生蕃のアイヌ等が豪弓〔ママ〕の矢面には立つべうもあらず面早やしどろもどろに打乱れたが土人等少しも騒かず大盃を傾けて呻ふる程に酔ふ程に先きの程から囃し立てる太神楽や剣舞に、浮かれ出六助翁真先きに舞台に現はれたれば我れも我れも嫁女のチカマチユコモイン、貝澤ウエサナシのアイヌ連之に継ぐサー大変、之れからアイヌの踊の始まりとあつて群眼を皿にして見物する、鱧の皮の着物を着たチカマがドンコリユー（五弦琴）の音も妙に弾奏する他の三人打ち連れて足拍子可笑しく踊り出す其の珍其の妙到店〔ママ〕筆紙には尽せ無い、踊も一段済むと先きの程から首を長うして居たギリヤーク、オロツコもジツとして居られ無なつた

▲太古の楽の音 豚尾漢のギリヤーク頭領ポーコン君プキオン君オロツコのユバロク君何れも舞台の人となる新手の役者を加へて前記チカマはドンコリユー（五弦琴）アバロフはビヤポンをプキオンはテンコイン（胡弓）を合奏する、低い音調の余韻嫺々として太古を偲ぶ床の音に連れて一同円陣を作つて樺太ダインス〔ママ〕をやる単調ながら足拍子手拍子揃へて踊る様子の可笑しさは面白さに一同酔へるが如く拍手は間断無く起る、と今度は生蕃親子五人も舞台に現はれる、新手を入れかへて御覧に供するは生蕃美人の踊、亭主のパットチュワスが唳々たる笛の音に連れて妻君のピスイヤゴは踊り出す其の踊の珍妙なる事、お尻を後方二三尺も突き出して右に左に振り出す、手も足も一向活動せずにお尻許り無性に振る、満堂をつと洪笑〔ママ〕する

▲珍妙な尻踊 此の踊りの一段こそ天地も引つ繰り返る程の大喝采土人踊中の最なるものである、此の体を見た依の六助盛に尻を振つて居る生蕃の後ろに廻つて妙な腰付きで踊る、入替つて北海道アイヌのバツコ（老婆）コレヤアタン刺身〔刺青〕の中の口からとは思へぬ優に優しい音声で鳥の立つ時の目出度歌を唄ひながらアツシの袖を両手に取つて舞ふ芸者連が現はれて三味を揃へて活惚れを弾く六助翁か日本式に之に合せて踊る、果ては土人全部が一同に成つて踊るやら跳ねるやら此の■俗塵と放れたる歡樂境の如く歡興時の移るを忘れて早や九時は過ぎたので名残惜くも閉会した、来賓の重なる者は

原内相、内田外相、元田総裁、樺山伯、二條公、徳川頼倫侯、徳川達孝伯、小松次官、押川次官、古賀警保局長、吉植代議士、管原代議士、近藤廉平、大倉喜八郎、江見水蔭、吉井勇、久方博士、桜井東大総長事務取扱、古在、井上哲次郎、奥田、坪井の各博士、寺崎廣業、岡田三郎助、横山大観、高村光雲、片岡仁左衛門高、〔7文字分空白〕田実、藤沢浅次郎、村田正雄、市川猿之助、佐藤千枝子、森律子、鈴木トク子、村田カク子、桃川■燕、三遊亭円遊、談州樓燕林、下谷松葉家おいろ、日本橋区藤村小稲、向嶋松島家小歌、同若狭家おきく、吉原伊勢家なつ、葭町布袋家さだ、富士町富士家辰奴、全栄家房吉等、大臣、名士、新聞記者、学者、美術家、男優、女優、講談師、芸者等無慮千余名

▲人種懇親会と諸名士の感想

近頃催はされた総ての集會に通じて是程成功した會を見た事が無いとは昨夜拓博の人種懇親會へ出席した人の悉く感じた處である今其如何なる會であつたかと云ふ事を列席の諸君の口から聞いて見た先づ此會と尤も関係深き元田拓殖総裁の談を聞く

▲元田総裁曰く 『如何して未開の人民と云つて決して馬鹿に出来ないまあ彼の風彩〔ママ〕と容貌を見給へ却々立派なものだ就中あの生蕃を見給へ、あの子供等は教育次第で屹度立派な人間になると思ふ國家の爲め慶賀すべき事ではないか』

▲江見水蔭君曰く 『僕は從來■■蕃人の事を小説に書いた縁故から別段に面白いと思ふあの酒に酔て面白さうに騒いでる様子は確かに小説中の人物だ何れ何か考へて見ませう』

▲市川猿之助君 新□い趣味を解する俳優猿之助君を樺太アイヌに紹介した處が猿之助君痛くアイヌが気に入つて膝を乗出して曰く『此奴ア面白い、芝居になります然しこの面は一寸困りますなあ何か一番工夫して見ますかな』

▲寺崎廣業君 廣業君杯を手にしてアイヌの踊りを見ながら隣の海野美盛君を顧みて曰く『アノ躍りなら僕にも出来るイレヲ〔ママ〕一つ稽古して大に流行させる事にするかな』美盛君曰く『妙？妙？一所にやらう』

▲長晴登君 生蕃の婦人が臀部を突出しての大に振つた舞□に感心して曰く『之が今日の圧巻だね』前席の小林源蔵君は曰く『あの点是用蕃□却々進歩して居る之は世界中何處へ行てもある形サ』

▲吉原のさだとなつ 全じく生蕃婦人の尻振<sup>おどり</sup>■を歎服して曰く『あの躍りを芸にして芸妓になれば屹度亮

れますね自宅へ抱へやうか知らん』

▲新歌手吉井勇君曰く『余り感興が多くつて歌も出来ません何れ後から考へて御覧に入れませう』

▲坪井正五郎博士 自分の内の子供達が評判の美いのを見る様に喜んで曰く『イヤ斯う皆が一致して楽しみ遊ぶと云ふ事は二度と出来ない事です今夜は余程嬉しいと見えてあゝした愉快を尽して居るが全く容易に出来ない事です之が彼等の郷里の同胞に与へる感化は非常□ものでせう〔全文〕

1912.12.03「犬橿で氷海を突破して帰る樺太人／土人連の深い印象」

不忍池畔に天下の人気を聚めた拓殖博覧会も愈々予定の会期終つて去る廿九日を以て閉会する為め其前日の日曜の如きは開会当時に優る稀有の入場者を見た又同館内で非常な人気を博した各土人連のうち本場のギリヤーク、オロチョン、アイヌ等は厳寒の候に入と

▲海面が結氷 して内地との交通が絶える為め去月二十四日小樽出帆の東海岸行き終航船で帰国する筈であつたが本年は寒気の至るが早かつた為め同船は既に去る二十二日出帆して仕舞つたので樺太土人も閉会まで居る事となり本月初旬郵船会社の砕氷船で帰国の途に就き交通の便なき柴浜から奥の方の彼等の郷里まで約八十里は海と無く河となく一面に張り詰めた氷雪の上を一行八人で最も危険にして痛快なる犬橿旅行で来春に入つてから故郷に帰り着く筈である又生蕃や北海道アイヌも閉会と同時に久しぶりで故郷に帰るのを待ち焦がれてゐるが生蕃の方は

▲樺太土人 と反対に更に暖かい国へ帰るのだから心配はない彼等が滞京中の印象を聞いて見ると樺太土人も生蕃も一様に驚いたのは人の多いのと家の大きい事面白かつたのは動物園の猿と花屋敷の生人形と操り及び奥の常盤で半玉と一緒に踊つた嬉しいのは内地の人がいる☒と親切にして呉れて宴会なぞの時には思はず知らず踊り出すほど興が乗つて来るまで打解けて呉れること更に智識を得た事は樺太土人や北海道アイヌは日本語に益々円熟して日用語には殆んど差支のないやうになり生蕃の子供ユミンパツトは『今日は、お早う』も覚え甚だしく遊び方まで文明化して来たと生蕃夫婦は喜んで居る又ギリヤークのお婆さんは半玉の着物が非常に気に入つたから娘に買って行つて遣りたいと言つてゐた。〔全文〕

1912.12.18「珍客郷に急ぐ」

過般催せし拓殖博覧会よりの招ぎを受け華の都に於て天下の視聴を喜ばしめ楽しめ数旬の間到る所より優遇歓待せられ日本人すら羨む底の光栄を得たるアイヌ種の坪沢六助(六〇)同テル子嬢(一二)同チカマ(二三)チユコモリ(五〇)オロッコ種のイバロク(五七)ギリヤーク種のポーコン(四七)チエフレンド(六〇)ブンヨン(一九)一行総て八名の珍客は何れも附添人佐々木政治(樺太庁)吉岡信平(敷香部落総代)両氏に率ゐられ五日帰還の途に就き八日小樽に到り旅館江州屋に宿泊、毎日便船の無きに焦慮中の処十五日愈々敦賀丸の出帆となるや彼等は拵躍禁じ難くの思して之れに乗り込み翌日午後九時大泊に無事上陸旭館に一泊昨日二番列車に搭じて当町を経此所より各自今や陸路を辿りて家郷に急ぎつゝあり彼等の如きは真に一歳一遇の幸運者と謂つ〔ママ〕可きか次号には彼等の逸話並に感想等記者の最も趣味深く感ぜしものを掲載す可し〔全文〕

1912.12.19「拓博帰りの珍客」

昨紙新報の珍客一行八人の本嶋土人は昨日大泊より当町に來り北越館に投宿し昨日は樺太庁を訪ふて竹内、尾崎両部長より食堂に於て午餐の饗応を受け今朝柴浜行の列車に搭じて愈々帰郷の途に着く筈なり。一行中最も能く日本語に通ぜる坪沢六助爺さん往訪の記者に語りて曰く、東京は気候が暖か過ぎるのと食物が違ふのとで最初は一同如何しよかと心配しましたが其の内に段々と馴れて来て何ともなくなりました。東京は賑かです併し私共の一番驚いたのは賑かなよりも凡ての物が立派なよりも何よりも人間の多いの事です之れには全く魂消てしまいました言語が相互に通ずる事なら東京に住みたいような気もしますがヤツパリ寒くとも淋しくとも生れた所が良いと見えて愈う明日は東京を立つと云ふ本月の四日になると一同は飛立つ程に喜びました。小樽へ着いてから娘テルが感冒で臥れたので非常に心痛しましたが小樽のお医師さんに助けて頂きました。小樽で一週間ばかり船待ちして居る間に無聊の余り寿館へ活動写真を観に行つたが客は五六十人より来ませんでした小樽は未だ田舎です。御存知の通り私共は東京へ参りまして、非常な歓迎を受けましたので斯麼幸福な事はありません私だけ又大阪の博覧会へ是非行きたいと思つて居りますが其迄生きて居ればよいが娘は片仮名を読み書きしますの幸に帰つたら学校へ入れて将来は東京へでも住ませたい望を持つてゐます。樺太へ帰つて来たら恐ろしく寒いので

困ります云々と胡麻塩頭を振り乍ら元気良く話した。アイヌの方はあぶないながらも皆日本語を話せるが他の二種と来ては殆んど通じない様子である。

佐々木囑託曰く

△電報の迅速に驚く 彼等も電報の迅速と云ふ事は知つて居たが小樽へ出てから敷香支庁へ電報をうち其返事が二時間程で達したのでギリヤークのボシコン叱驚して曰く、巳<sup>あ</sup>らが七日もかゝて来た所をこんなに早く行つゝ来るとは余り早過ぎる

▽生蕃とアイヌ アイヌ生蕃を評して曰く彼等はいつても裸体で野蛮さ加減が判つて居ると生蕃曰くアイヌの様にボンカリではとても人の首はとれないワイ

▽六歳教育を説く 六歳〔六助〕大に感じ入り帰つたら児童の教育をウンとやらねばならぬワイと他のアイヌを説き他のアイヌ亦大に之を賛した

▽テル大に弁を振ふ 六歳の娘テル(一一)が絵葉書店の売子をやつたが仲々人気が多い、いつも其前は人の山テル折々叫んで曰くそんなに妾しの顔を見なくても此絵葉書に皆んな書いてあるから買つて下さい〔全文〕

1912.12.20「昨朝の停車場／▽珍客愈々郷に向ふ」

昨日の北部行きの停車場は頗る賑かなものであつた。拓博で一時に天下に其名を轟かした珍客アイヌ坪沢六助外七名の一行が敷香の部落総代吉岡氏に引卒〔ママ〕せられて懐かしき家郷に急ぐの旅であつた。オロッコ、ギリヤークのポーコン、チエフレンド、プシヨンは何れも華の都で新調した背広服にオーバーを着し中折帽子を被つて一見紳士然として居つたソレカラ六助の愛嬢で東都で評判されたテル子と嫁のチカマは日本服に角巻を着し編上靴を穿いて居た六助とチエコモリは二人共矢張り東京で新調して無尻外套に中折帽子を被つて何やらいろ〓と話して汽車の発車を待合して居た記者が行くと六助は昨日はドーモと謝意を述べてソシテ今朝の寒は随分ヒドヒネイと云ふ傍に居たテル子や其他のオロッコ、ギリヤークも各々笑顔を作つて記者に挨拶をした六助は記者に是非東海岸に出た時は小田寒の自分の家に寄つて呉れと云ふ孰れもの顔は愉快ソウに輝て居た其内に発車の時間が来たので一同は列車に乗込んだオロッコギリヤークの面々は得意になつて二等室に乗込んだが吉岡氏は其れではない此方だとして三等室を指して教へると妙な顔をして氏の後に随つて指定の室に乗込んだ僕と吉岡氏と話して居る中に佐々木氏か来た八名の珍客は何れも佐々木氏を見るや

待構へたと許りに種々話し掛ける佐々木氏は都合があつて此度は同行する事が出来ないから明日は屹度行くと云ふと是非一処に行かうと云ふ今まで数旬の間起居行動を俱にして来たので彼等の名残を惜むものも無理はない其内に列車は定時より二十分遅れて動き初めた佐々木氏や僕が左様ナラと云ふと一同は窓に寄つて左様ナラと言つて別を惜んだために皆の眼は潤んで居つた(天の字)〔全文〕

1913.01.08「土人等の着敷」

拓博よりの帰途当地に立寄り先月二十日出発したるオロッコ、ギリヤーク等は一昨日無事敷香に着したる由〔全文〕

1913.02.15「冬の夜話(二十九) / アイヌにしてはお綺麗な方」

西園寺総理の臨場の際は生憎樺太館に案内者がなかつたにしろ東拓対樺太は成功であつたソーなアイヌギリヤーク馴鹿のあるを知らした丈けでも成功であつたと云ふ事だ処が余りの成功であつた為めか樺太と云へば丸でアイヌギリヤークの国であるかの様に一般から思はしめた開会期日も早や済んで今や残務の其時委員栃内福永菅野松山の諸君は種々樺太関係者と留別の意味で小宴を張る事になり樺太の連中が何人後に行くからと手近かな鶯谷の伊香保に電話し暫らくして出懸けると不思議や出迎ふ下女から男衆迄ジロジロと異様の目で側で不気味の悪るサ夫れのみか座敷へ迄遣つて来て代る代るに隅見をする有様固より見せるが本意の博覧会役員でも余り好い気特〔ママ〕はせんので拍手一番女将を呼んで其理由を詰しるとハイ誠に申澤〔ママ〕は御座いません実を申せば樺太の御客様との事でしたから刺墨した御髯の沢山な御方と思ふて居ました処打つて変つて枕尽にあるような殿御の御出でにアイヌでもアー御立派な方があるかイヤアイヌかアイヌであるまいかと皆の者が評定中で飛んだ失礼致しましたが旦那方は樺太でも全くアイヌとやらでは御座いませんかと又しても半信半疑の間に年若丈けに是非がなく福永先生人を馬鹿にするなど赫と怒鳴りつけたので是れ幸ひ一番アイヌになつて珍趣向の遊をせんと栃内松山の先生等がソロソロ狂言に取懸らんとする所を打ち毀して了まつて果ては大笑になつたが若しや菅野君独得メノ子直伝の尻振り踊を遣つ付けたらエライ御土産であつたらうに〔全文〕

1913.03.07「拓博出品彙報／△出品協会役員会決定」

明治紀念拓殖博覧会出品に就ては藤井囑託は過般来大阪に出張諸種陳列場の計画を進行しつゝ、有るが一方樺太庁及び出品協会に於ても頻りに其計画を進め今日にては大体の方針確立したるが明日の上川丸にて第一回の発送を為す由尚出品に就ては今日の本島としては農作物、海産物等到底新生産品を得る見込無く幸ひ前回東京に於て開催せられし拓博の出品が今日尚多く其まゝになり居るを以て之等前回の出品を主とし之れに林産物其他多少の新品を加へ陳列する筈、此他前回出品に比し特に新らしく計画せられたる特種出品少き模様なるも今回は嶋産清酒の各種を出品するの計画あり又土人の出展は之亦前回同様アイヌ、ギリヤーク、オロチョン等各種土人を出展せしむる筈なるも人選定らず本日樺太庁佐々木囑託小田寒方面に出張決定の筈なりと

尚之等各種出品の陳列に就ては藤井囑託の既に出展奔走しつゝ、有るも前回拓博に際し其陳列事務を担当して成功せる福永審査事務官は今回も出展陳列事務に鞅掌する事となり明日大泊出帆の上川丸にて出発す可し尚出品協会役員は左の如く決定昨日夫々囑託状を發せり△幹事 福永尊介(長) 川西幸八、中牟田五郎、前嶋進、中村隆、藤森正隆、藤井祐敬△評議員 池上安正、村上祐兵、大橋秀次、向瀬庄次郎、扇田彦八、乗富慶之、大井寛二、神代澤身、脇田嘉一、柳川振、河合梅三郎、前嶋進、川西幸八、藤本正隆、米木六右エ門、遠藤米七、竹内友二郎、本居幸吉、田中文太郎〔全文〕

1913.03.13「拓博と土人出場」

今回大阪市に開催さるべき明治紀念拓殖博覧会にては本島土人の出場を希望し過般樺太庁へ其勸誘並に手配方を依頼し来りたるを以て庁は夫々手配を為したり其結果出場人種はアイヌ、オロチョン及ギリヤークの三種族にして其人数はアイヌ四人オロチョン及ギリヤーク各二人宛に決定しオロチョン、ギリヤークの方は敷香総代吉岡信平氏が例に依つて囑託を受け彼等を周旋し又上阪の際は三人種其の附添役を為す筈なるがオロチョン、ギリヤーク人の撰定は未だ確定するに至らざる由なり而してアイヌ種の方に対しては樺太庁庶務課勤務囑託技手佐々木政治氏去る八日東海岸相浜へ出張し大酋長バフンケ事木村愛吉の許に於て万事を取決め来れり其談に拠れば小田寒の坪井〔ママ〕六助は昨年の東京拓殖博覧会へ家族を率ゐて出場したる経験あるを以て彼れなれば事情にも精通し居るのみならず日本

語も好く解し殊に娘のテル子の評判頗る好かりし故今回も是非上阪せしめ度く交渉せるも彼は病気にしてテル子も亦近頃兎角健康優れざる為めとて承諾を得るに由無く已を得ずバフンケの処へ行き他の候補者に就て相談したる処結局保呂の白川茂衛門(五四) 同人妻アソワンマ(三七) 及小田寒ハイバツテイ(四十) 同人娘シュカ(一三)の四人に決定したるを以て佐々木氏は彼等に対して来月上旬早々出発せざるべからざるものなるに付き今より土人アイヌとしての仕度其他の準備を整へ置く様にと命じ来れる由因に白川茂衛門は嘗つて二十歳台頃には函館の某漁業家の本嶋漁場を支配したることあり尚ほ最近迄は東白浦の部落総代を勤めたる程の老人にして勿論日本語にも精しく現に保呂川の渡船業を営み居り仲々の元気者なりと次にハイバツテイは茂衛門程の人物にはあらざれ共彫刻其他アイヌとしての手芸に頗る堪能なる者にして其娘シュカは目下土人学校の尋常二年生なるがテル子嬢にも劣らぬ美人なる由なれば大阪に行かば定めし大もてにもてるなるべしと云ふ〔全文〕

1913.03.13「公人私人」

▽佐々木政治(本庁庶務課囑託技手) 去る八日榮浜方面へ出張中の処一昨日帰庁

1913.04.03「拓博行の土人／一昨夜到着す」

大阪拓殖博覧会行土人中アイヌの事に就ては先日の紙上に詳しく報導〔ママ〕した通りて保呂の、白川などの男女四人と決定し其中にはハイバツテイの娘シュカ(一三)とて愛らしく盛りもあり、出展後は例によつて絵葉書売りに人気を惹くなる可く彼等は近く船便の都合を見計らつて出て来る筈である、所でギリヤーク、オロチョンの方は敷香の吉岡総代が引連れ先月二十六日敷香を出て一昨日当地へ着した、一行は四人でオロッコではシャチカに〔ママ〕部落の男ワシラノ(三六)其娘マリヤ(一五)と云ふ之も可愛盛り、ギリヤークでは男ウエラッカ(二八)其妻アルライカ(一八)所で此ソシライ〔ママ〕はオロッコ中での才子とかで去年中目文学士がオロッコ語研究に出かけた時、其語学の先生と云ふは此ワシライだそうな、親に似てマリヤも亦愛らしい計りでなく仲々に才の利く方だそうな、夫からギリヤークのウエラワカ〔ママ〕は一寸日本語の片言位ひを聞き覚えて居つて自分の名を卯太郎と云つて居る由、之も昨年此方面の人類調査に従事した鳥居龍藏氏のコックスを勉めた男で其当時は無妻であつた

が此冬馴鹿轎で露領に這入つた時其所のギリヤークの娘と相思の仲となり未来の契りをしたが卯太郎帰来此娘の事が忘れず直ぐ引返して貰つて帰つて宿の妻としたのが此アルライカであるそうな娘らしく、羞んで居る所など此人種の間には矢張り、雨に濡れたる海棠とか露に萎る、女郎花とか持て囃さるゝのであらう〔全文〕

1913.04.05「拓博行土人全部着」

今回大坂〔ママ〕拓殖博覧会へ赴く本島土人は既報の通りアイヌ四人、オロッコ二人、ギリヤーク二人にして一昨日アイヌ四人当地に到着したるを以て之れにて全部打揃ひたれば吉岡氏保護の下に七日大泊出帆の大礼丸にて愈々上坂の途に就くべき予定なりと因に一行は北越館□宿泊し居れりと〔全文〕

1913.04.08「拓博行土人出発」

大坂〔ママ〕市に於て開設さるべき明治紀念拓殖博覧会へ出場すべき本島土人の事に就いては屢々記載せしが之等土人のアイヌ四人、オロッコ二人ギリヤーク二人は一昨日二番列車にて敷香総代吉岡信一〔ママ〕氏附添ひ当地を出発し一行は昨日大泊出帆の大礼丸に乗込みしが途中東京に三四日間滞在し諸方を見物したる上開会の前日即ち来る十四日大坂市に到着の予定なりと〔全文〕

1913.04.18「拓博出品発送済」

出品協会よりの大阪拓殖博覧会に対する出品物は去る八日真岡よりの発送貨物を最後として全部発送済となれるが出版土人は二十日着阪す可く又馴鹿は本日函館より三池丸に積込廻付の由〔全文〕

1913.04.23「樺太館の大好評」

大阪拓殖博覧会は既報の如く一昨廿一日午後開会式を挙行し午後より一般観覧者に入場を許せるが樺太部の犬轎中央森林並に海の模型等に対する評判非常に高く人気を集中し場内中独り樺太館は多大の雑鬧を極めた結果同所に雇はれ居たる女看守の如きは人に酔い遂に卒倒するに至れる由昨日樺太出品協会へ電報ありたりと〔全文〕

1913.04.26「拓博と樺太館(下) /▽設備万端遺憾なく▽到る処賞讃を博す」

〔前略〕教育及土人風俗に関するものは美術館に陳列

したり、館の入口の上部に「樺太」と書したる華やかなる扁額を掲げ、館内に入れば周囲の壁面には種々なる図表並に写真類を懸け特に交通図に附して大礼丸の模型を添へたるもの先づ眼を惹く、天井には四間四方に亘る樺太神社紋を付け其の思ひ切つたる大袈裟には何人も驚かざるものなし

土人ギリヤーク、オロッコの二種族は本館入口の正面に当る広場に天幕を張りたる中に二種族四人仲善く住ひ、アイヌ族は美術館の前面西側□特有の家屋を模造して其の中に住み何れも頗る元気善し

馴鹿は本館前に在る池の辺りの松林に遊牧せしむる筈なるも未だ到着せず、右は二十三日大阪発の電報を訳出したるものなるが〔後略〕

1913.05.07「樺太風光映写の大成功 /大坂拓博に於ける」

拓殖博の活動写真は二十六日から映写して居るそして開館当時は台湾、関東州、朝鮮、北海道のみで樺太のものは無かった、館の工合が、写真の工合か、夫れとも技師の工合であるか如何にも不鮮明で余りに観客の興を惹くに至らなかつた所へ三十日樺太のフィルムが着して其午後始めて撮影した所意外に鮮明であり且つ画面が如何にも目新しいため非常の人気、五百尺のフィルムを映じ終る迄拍手は急霰の様、

先づピリピリと笛が鳴ると胸をそゝる様な楽隊の音がピタリと止る、弁士がスーと横から出て直角に前へ五六歩型通りの礼があつて『さて今回映写しますのは新に着しました樺太の光景』と云ふともうワーッと云ふ賑ひ、ピリピリと又笛が鳴つて電灯がパッと消えると□一に東海岸の土人の頭目バフンケを中心としてアイヌ生活の状態が移る〔ママ〕、

『同じだすナ、同じだすナ』

と彼方此方から聞える之れは出場のアイヌとの比較であらう、画面が変わりますとオロッコ、ギリヤーク生活の状態と御座いましてギリヤークの小屋の前で頭を糶り出して来た観衆の事とて大喜び、

『アラアラ彼処に小屋ん中に居やはつたのが居やはりま、居やはりま』

『違つてまんがナ』

『□やずへん』

『子供はんや、子供はんや』

『土人はんにも子供はんがおまんのやろか』

『土人はんやかて子供はんがおまんがナ』

など、姦しい、食事を終つて二、三の荒くれ男が狩に



つ、樺太絵葉書を売つて居るのは可愛いアルライカさんとマリヤさんワシリイ君や、ウエラツカ君は肉を切つたり飯を炊いたりして居る、そして総代の吉岡君が朝夕と此小屋に立寄る毎に今日の卵は、腐敗して居つたとか肉が臭かつたとか、さては退屈だからトランプを買つて呉れ、之でも露助を相手の上手だよなど、我儘を云つて居る、

本館の門を出で、宝橋と云ふ支那の芝居でも有りそうな朱塗りに模様のある橋の下を通つてダラダラ坂を上り詰めると其所には参考館がある、此参考館は前の博覧会の時の美術館で階上から後方を望めば其所は一帯の花園で其尽きる所が靖国神社で風光甚だ愛す可き者がある、アイヌの小屋は此美術館庭の一隅、ピヤホール紅葉亭の傍大松の下に建てられてある、此小屋の傍には又例の如く卓を置いて娘シューカさんが愛嬌をまきつ、絵葉書や細工物を売つて居る小屋の中では男二人は彫刻、クルバルンコ〔ママ〕さんは刺繍を遣つて居る、併し絵葉書は売れるが趣味の低い大阪人には此アイヌ細工などは向かないと見えて一向に売れない模様、唯ステッキなどを持つて来ては彫刻を頼む位らしい

彼等が初めて大阪の見物をしたのは五月の四日で、三越呉服店の好意で同店の自動車に乗り込み意気揚々として全市中を乗り廻し、夫から三越の休憩室に入り込んで色々御馳走になつた上土産物迄貰つて帰つた、夫迄は彼等は何れも樺太へ帰りたい帰りたいと口癖の様に云つて居つたが、其後と云ふ者はすっかり大阪が好きになつて終い、今度は吉岡君を捉えては見物に伴れてつて呉れと強要んで居た、其結果彼等は樺太でもまだ沢山参拝した事の無い明治天皇の御陵を参拝し宇治見物と洒落た、堺は見物の筈であつたが遂に見合せとなつたので残念がつて居る、土人と土人は非常に仲がよく毎日の様に小屋と小屋との間を往訪して居た

彼等は愈々明日樺太へ発つと云ふ日絵葉書、写真、反物其他一人約五円位の品を土産として本会から貰ひ勘からぬ貯金を持つて、先月の二十四日に大阪を發つた、

彼等は皆一日一円の日当で夫れに時々手当が出る、食料は全部本会から現品で渡す、見物の費用、旅費皆本会持であるから、何れも尠くも六七十〔ママ〕の貯金をして居る、

停車場に彼等を迎えると車窓から早くも記者を見つけたワシリイ君はヤー何とかと挨拶をした、イマリヤに何うだ大阪と樺太と何らがよいかと云ふとウエラツカ

が引取つて、大阪に居る間は樺太が恋しいかつたが、来て見ると大阪の方がよい併し東京が一番面白そうだと云つて居た、

一行は昨夜は北越館に宿つて活動写真を見て今日は栄浜に向ふ筈である、皆んな又山奥へ行くのかいやだいやだなど、云つて溢して居る、一番面白いのは彼等はいつの間にか大阪訛を飲みこんで終い宿屋へ泊つた時など半可の大阪訛に女中を驚かすのを唯一の愉快として居る、北越館のゾーズの女中が此大阪訛に中てられて『土人でも隅へはハア置けにやいです!』〔全文〕

1913.07.10「拓博出品物寄贈」

曩に大阪に於て開催せられたる明治紀念拓殖博覧会に対して樺太庁より参考として出陳せる露国式丸太小屋及び材鑑は之れを研究資料として京都帝国大学に寄附すること、なり既に其の手続きを終りたるが此の程右に關し京都帝国大学総長澤柳政太郎氏より平岡長官に宛て懇篤なる謝状到達したりと〔全文〕